
救世主 = . . . オレ!?

リョースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救世主……オレ!?

【Nコード】

N2196B

【作者名】

リヨースケ

【あらすじ】

自分の住んでいる世界とは違う異世界に飛ばされてしまった男子高校生。そこには今まで見たこと聞いたことのないものばかりだった。彼は元の世界に戻るためにある大会に参加することになる、『救世主』として。

第01話 救世主の始まり（前書き）

どうも、リヨースケです。

今回は一番はじめの話とすることで、少々長めになってしまいました。
た。

次話からはこれの半分程に予定しています。

だいぶ読みにくいと思いますが、これからよろしくお願いします。

第01話 救世主の始まり

走る、走る、走る、振り返る、撃つ。

走る、走る、走る、隠れる、撃つ。

走る、走る、転ぶ、撃つ。

走る、走る、走る・・・。

「ふう、こんなもんだろ？」

俺は瓦礫と化した人家であっただろう建物に隠れ、背後を確認した。

・・・、どうやら誰もいないようだ。

再びため息を吐き、その場にしゃがみこもつとした瞬間、

「・・・っ!」

敵が俺の背中に銃を構えていた。

ヤバイな・・・

「そのまま手を上げて、持っている武器を全て捨てる。」

奴は俺に冷たい銃口を向けながら、重く低い声で命令した。

「早くしろ。」

どうやら逆らわない方がいいみたいだな。

俺は手に持っていたサブマシンガン1丁と腰に付けているハンドガン2丁、そして肩から腰まで伸びているベルトに装着してあったグレネード弾3発を足元に落とした。

「そのままの格好でこっちを向け。」

命令に従い相手の方に体を向ける。

「なんだあ？まだグレネード1つ残ってるじゃねえか？お前死にたいのか？」

銃口を胸元から頭に持っていき、引き金を握った。

・・・

「死にたくないならとっとと捨てる。」

「ああ、わかったよ。」

素直に従う・・・

「わけねーだろ!!!」

右手にそのグレネードをつかみ、そのまま床に叩きつける。その瞬間、その場が目を開けていられないほどの光に包まれた。

「くっ、スタン・・・グレネードか！」

奴はそのまま目を瞑り、その上から腕を押し当てた。俺は自前のサングラスを付けてその場を離れる。

ようやく光が収まった。

「くそ、どこに行った!」

「ここだよ。」

「ちっ!」

その時にはもう、勝敗はついていた。

俺は後ろからしがみつき、奴の喉にナイフを突きつけた。

「どっするっ。」

俺が問う。

「・・・」

「さあ!」

「はあ、分かったよ・・・俺の負けだ。」

その瞬間俺はナイフを納めた。そいつはそれを確認すると、俺の方に肩を組んできた。

「やっぱりお前強いな。敵に回したくないよな、アツハハハ!」

そいつは俺の耳元で大きな声で笑い始めた。

うるさい。

「当たり前さ。お前とは鍛え方が違うんだよ。」

そう言い返してから奴の腕を振り解き、床に捨てた自分の武器を拾う。

「ちえ、俺の方が銃の腕はいいんだけどな。」

「お前はそれだけだろ？俺には体術と“頭”があるからな。」

「そうかよ。」

まあ、確かにこいつの射撃の腕は確かだけど、他がな・・・

「さあて、ゲームも終わったことだし、飯食いに行くか。」

「約束守れよ？」

「分かってるって、奢ればいいんだろ？」

「ああ」

そう、俺たちが今までしていたのは格好よく言えば【サバイバルゲーム】だが、幼稚に言えば【戦争ごっこ】だ。もちろん武器は全てオモチャだ。ナイフを除いては・・・

これだけは本物でないとな。

これは俺のこだわりのようなものだ。

あいつも一応ナイフは持っているけど、銃しか使わない。
本人曰く

『ナイフよりも格好いいし使いやすい。』

そうだ。

俺にはそうは思えないけどな。

銃もいいが、やはり男なら拳か刀でガチンコ勝負を希望するね、俺なら。個人的には、普通の剣やナイフもいいが、それよりも槍とか斧とか、結構マイナーだけど鎌なんかが好きだね。

・・・

あ、自己紹介するの忘れてた。

オッホン！

俺の名前は雲雀千夜^{ヒバリセンヤ}、17歳。

趣味は格闘技。体術なら一通り極めてある。体術だけでなく剣術と棒術も習得済みだ。

でも1番は素手だな。

特徴は、戦場だと頭の回転が急速に増すことだ。

それ以外では、この頭は使い物にならない。これは短所でもあるが・

で、さっきの奴は須藤昌^{ストウマサシ}17歳。

さっきも言ったが、あいつの銃の腕前はプロ以上だ。

ただ、あまり格闘戦向きではないようだ。

ちなみに俺はマサと呼んでいる。

マサとは小学校からの付き合いだ。親友と言ったところだな。

「お〜い、千夜！いつまでボ〜っとしてんだ？早く行くぞ。」

「ああ、今行く。」

マサは先に廃墟から出ようとして、突っ立っていた俺のことを呼んでいる。

お前の説明してたんだから少しは待てよ。

と言ったら変人扱いされてしまいそうだから止めておこつ。

その間にマサはすでに外に出てしまったらしい。

さて、俺も行くか。

“・ラ・・ア・・ヤ・・”

？今何か聞こえたような気がしたんだけど？

その場に立ち止まり耳を澄ましながら、神経を集中させて辺りの様子伺う。

自慢じゃないが、隠れている敵の位置などは瞬間で分かる俺である。気配などを察知するのは得意分野だ。

その俺とつるんでいたせいかわ、マサは俺に見つからないように移動するように努力していて、最近では気配を消して行動できるようになっている。

俺には敵わないけどな。

“ル・ア・・メイ・・ヌ”

聞こえた。

はっきりとは聞き取れないが、何者かが言葉を発しているのだけは分かる。

俺はすぐさま腰に付けているトランシーバーの電源を入れ、コールボタンを押す。

10秒後にマサが応答した。

「俺だ、マサ。さっきの所に大至急戻ってきてくれないか？」

誰かがいるわけでもないが、細心の注意を払いながら小声で話す。マサもそれに気がついたのか一言“了解”と小声で言って通信を切った。

こうゆう時には頭が働く奴だ。

少ししてマサが気配を消しながらやってきた。

「どうした？千夜。」

小声で話しかけるマサ。さすがに状況が分からないためか、難しい顔をしている。

「ちょっと静かにして耳を澄ましていてくれないか？」

「分かった。」

2人して耳を澄ます。

わざわざ屈みながらってところが、本当の機動部隊みたいでつい苦笑してしまう。

“ ペル・ ・ ・ イ・ ・ ・ ローシユ・ ・ ・ フィ ”

「何だ？今の声は？」

どうやらマサにも聞こえたらしい。やはり幻聴ではないようだ。それにしてもさっきよりだいぶ発音がはっきり聞こえるようになってきている。

「やっぱりお前も何か聞こえるか？」

「ああ、なんて言ってるかは分からねえケドな。」

さて、どうしたものか？

このまま帰ってもいいのだけれど、こんな物を聞いてしまったのは確かめてみたくて仕方がない。

マサも同じ事を考えているのだろう、好奇心でめが光っている。

確かめるかな？

「なあ千夜。どこの誰がいるか知れべて見ないか？」

ほら来た。

「いいぜ、俺に異論はない。」

ここまで来てしまっっては引くに引けないからな。俺も。

“ セン・ ・ ・ ジュ・ル・ ・ ・ リイ・ ・ ・ レイ ”

やはりだんだんと声が聞き取りやすくなってきたているな。

もう少し耳を澄ませばどこから聞こえてきているか分かりそうだ。

・・・

“ フィーラ シュール ペリオル スチューラ ”

!?

「おい千夜！」

「ああ、分かってる！」

いつの間にか普通の声を上げてしまった。

それほど俺たちは驚いてしまったのだ。

今まで何を言っているのか分からなかった言葉が、今になって急に聞こえたのだから仕方がない。

今ので場所は分かった。

「マサ、こつちだ。」

「分かった。」

その声は俺たちがいた部屋から廊下らしき通路に出て、斜め向かいにある部屋から聞こえてきたいた。

俺たちはその部屋の扉に近づき、様子を伺った。

おかしい・・・

部屋の中から何か物音がするのだが、人がいる気配がまるでないのだ。
中にいるのがマサならともかく、常人がここまで気配を消せるはずがない。

“ワアーベル リュート デュル フィーユ”

声は確かにここから聞こえる。それは間違いない。

だがしかし・・・

「マサ、俺が扉を開けて中に突撃する。お前は少し下がって俺の後ろからそのスナイパーライフルで援護してくれ。」

「ああ、分かった。気をつけるよ。」

無言でうなづく。

“サーキュラハン カインドウロウ リヤングラス ソーリュ”

ドアノブに手をかける。

後ろを見ると、マサがライフルを構え俺に親指を立てている。生唾を飲み、意を決して扉を開ける体制に入った。

行くか。

“ソーシャル ソーシャル ソーシャル”

バン！！！！

扉をいきよよく開けて中に転がり込み、銃を構え中を見渡すが、そこには誰もいない。

あるのは足元にある、落書きのようなものだけだ。

蛍光塗料で書いてあるのか、それは足元できれいに光っていた。

・・・

「何もないな。」

そう呟いた瞬間

“エクソリア サームン！！！！”

足元からあの声が聞こえた。

ヤバイ！

が、気がついた時には手遅れだと思った。

足元から、先ほどまでよりも強烈な光が俺の体を包み込んだ。異変に気づいたのか、マサが駆け寄ってきた。

「千夜！大丈夫か！？早くそこから離れる！！！」

「大丈夫だが・・・足が動かねー！」

俺の足はまるで石化してしまったかのように動かなかった。かろうじて腕は動くようだ。

「待ってる！今助けてやるからな！」

マサが俺に向けて手を差し伸べる。俺もそれを握ろうとするが

「クソ！届かねえ！」

俺たちの手はほんとにギリギリで届かなかった。

どうすればいいんだ？

「そつだ。これにつかまれ！」

マサは俺たちの荷物に入ったリュックを差し出した。

やった。これなら届く。

「おし、つかんだ。引っ張ってくれ！」

ようやくリュックのベルトを掴むことができた。

マサがそれを確認して引っ張ろうとした、まさにその時。

「うわあ〜〜！」

「な、なに!?!」

光の強さがさらに増し、それに弾かれた様にマサが廊下の壁まで吹っ飛ばされた。

ドシンン！

マサが壁に叩きつけられる音がした。

それでもあいつは俺のところを走ってくる。

まずい、このままじゃあいつも巻き添えになる。

「待つてる千夜！今行くからな。」

全速力で走ってくるマサ。それをあざ笑うかのごとく光がまた強くなった。

それと同時に、この部屋から外に向けて突風すら吹いている。

このままじゃマサが危ない。

「まって……ろ、いま助けて・や・るから……な！」

突風のせいで上手く喋れないのか、それとも俺が聞き取れていないのか、マサの声が途切れ途切れに聞こえる。

これ以上はマサも危ない！

「マサ！これ以上くるな！お前は早くここから逃げろ！！！」

力の限り叫んだ。

マサの体が後ろに下がる。

本人の意思ではなく、突風に飛ばされかけているのだ。

「千夜！……俺は見捨てないぞ！」

「そついう問題じゃ……あがぁ！」

視界がホワイトアウトしかけてきた。

どうやらあまりに強すぎる光に、目の神経が耐えられなくなったよ

うだ。

「逃げ……。ろ。マ……。サ……」

「せんやあ~~~~~!!!!!!」

マサのその声を聞いた瞬間、俺の意識は途切れてしまった。

ああ。いったい何が起こってしまったのだろうか？

………

やっと光がやんだ。

俺は先ほどまで千夜がいたであろう場所に立っている。

が、そこにはもう、誰もいない。

先ほどまで聞こえていた声も聞こえないし、床の落書きももう光っていない。

俺はそこに膝を着き、両手を床に付けて叫んだ。

「千夜、千夜……。千夜~~~~~!!!!!!」

頬から流れ出た涙が床を塗らした。

久しぶりだな、泣いたのは。

先ほどまで騒いでいたせいだろうか？疲れて体が動かなくなってしまった。

おまけに眠気すら起きる始末だ。

自分の情けなさに苦情しつつ、俺はその場に倒れた。

あの青い光に包まれながら……

……

なんだ？この感覚は……

空中に浮いているのか？水に浮いているのか？はたまた宇宙に浮いているのか？

俺はまるで夢の中にいるような感覚だ。いや、事実夢の中なのかもしれない。

体も自由に動かないし、目も開けられない。

何か不思議な気分だ。

それなのに、心だけは心地よかった。

先ほどまであんなに切羽詰っていたのが嘘のようだ。

そう言えば、マサはちゃんと逃げられたのだろうか？

少々気になるが、今の状態では何も考えることができない。ただボーと浮遊してるだけ。

そうしていると、まぶたの上からまぶしい光が刺してきた。

ああ、きつと目が覚めるんだな。

俺の意識は、また一時的に途切れた。

「うう・・・ん」

く、体が重い。

無理もない。アレだけ動いて、叫んだのだ。肉体的に消耗しないほうがおかしい。

それに、俺の服装はサバゲーの時のままであり、防弾チョッキのよ
うなものを着ているせいでもあるのだろう。

それに加えて、ハンドガン2丁に後ろの腰にはサブマシンガン1丁、
背中にはマサよりは安いライフル。後はベルトにグレネード3発と
ナイフがある。

今からでも戦場にイけるような装備だ。

おまけに、あの時のリュックが体に乗っているらしい。
まさに戦死体さながらの格好で倒れているのだろう。

起きるか。

目を開けるのに、少し抵抗があったが、思い切って開いてみる。
まず目にしたものは・・・

「床」

当たり前だ。

うつ伏せで寝ていれば、嫌でも目に入る。

「よいしょっとー」

勢いを付けて上半身を起こす。

以外に軽く上がった。

「よし。さて、ここはどこだ？」

軽く辺りを見回す。

一見先ほどと同じ部屋に見えるが、よく見てみると人が住んでいるみたいにきれいになっていた。

電気・・・はないが、代わりにランプが天井にぶら下がっている。壁は全て石造りでできており、部屋の中は少し冷えていた。

窓には薄いガラスがはまっており、木でできている雨戸が閉まっていた。

どこだ？ここは。

腕を突いて足に力が入るか確かめた。

よし、立てるな。

ふつと軽く飛び跳ねながら起き上がる。

軽業師並みの芸当は、たとえこんな重装備だろうと容易にこなせる。立ち上がり360度回転して自分の状況を確認する。

体に異常はないな。

足元を見ていた時だった。

なにやらおかしなものが床に転がっていた。

長い木の棒と、黒くて大きな布に巻かれたマネキン・・・

「なんだ？」

違う・・・人だ。

杖のようなものを握って、黒いローブを着た人がそこに蹲るようにして倒れていた。

すぐに駆け寄って息があるか確かめる。

・・・

どうやら生きているみたいだ。

ひとまず安心した。

どうやら俺と同じ年くらいの女の子のようだ。

肌は白いし、ポニーテールの長い髪の毛の色はきれいな銀色をしている。どう見ても日本人ではないようだ。

少しためらったが、何か事情を知っていそうだったので起こしてみることにしよう。

肩を掴みゆすってみる

ユサユサ、ユサユサ。

「ん・・・うん。」

ユサユサ、ユサユサ。

「う、ふわあ〜。」

お、起きた起きた。

「おい、しっかりしろ。大丈夫か？」

「う…ん、だいじょう　っ！」

どうしたのだろう？彼女は俺の顔を見るなり絶句してしまった。

ほほお、瞳は紅か。

今はそんなことはどうでもいい。とにかく話を聞いてみなくては。

「大丈夫か？なあ、君に聞きたいんだけどさ…。」

「あ…は…せ…しゅ。」

「え？なんていったんだ？」

俺が聞き返すと、彼女はその紅い瞳を見開いて

「あなたは救世主！」

と叫んだ。

全く、どうやら訳が分からないことに巻き込まれちゃったらしい。
ま、結構わくわくしてるんだけどな！

第01話 救世主の始まり（後書き）

感想などありましたら、是非お願いします。
お読みいただきありがとうございます。

第02話 救世主はパシリ!? (前書き)

前回の言葉とは裏腹に、さらに長文になってしまいました>>>。

第02話 救世主はパシリ！？

ヒュッ！ダン！コト・・・
ヒュッ！ダン！コト・・・

「98い〜。」

ヒュッ！ダン！コト・・・

「99う〜。」

ヒュッ！ダン！コト・・・

俺は何でこんな事やってるんだ？

はっきり言って・・・いや、はっきり言わなくても理由が思いつかない。

足元に落ちている薪を見て疑問に思う。

そう、俺は今薪割をしているのだ。正確に言えばやらされている。今までのいきさつを思い出す

「あなたは救世主！」

・・・は？この娘はいったい何を言ってるんだ？俺が救世主？

突然のことに頭が混乱する。

さすがにその言葉が来るとは考えてもいなかったのだ。

この場合の定番といえば『きゃ〜！痴漢、触らないで！』とか、『泥棒〜！』などの言葉を言われると思っていたのだが・・・。
まさか、救世主とはね〜。

「は？救世主って俺のことか？」

一応後ろに誰かいないか振り向いてみる。
だが、当たり前ながらそこには誰もいなかった。

「そうよ。あなたは私が召喚した救世主よ。」

・・・

自慢するように言っているが、あいにくと俺には状況がつかめない。
当たり前だ。

いきなり目が覚めて、そこに倒れていた女の子に『あなたは救世主。』
』と言われて、動じない人間などいるはずがない。
もしいたとしたら、そいつの精神は少しヤバイだろうな。

「どうしたの？何か不満でもあるの？」

当たり前だ！この状況で不満がなければそいつは神だ！

しかし、この喋り方：とところどころに棘を感じるな。
性格もおとなしそうには見えないし、これはツンデレタイプと見た！

「不満とかその前に、ここはどこで君は誰だ？そして俺はどうしてここにいる？」

相手の性格なんて知ったことか。

俺は疑問に思っていることを素直に訊いた。

すると彼女は驚いたような顔をして、少し俯きながらぶつぶつと独り言を言っている。

いつたいなんだ？

と、何か思ったことがあるのか厳しい表情で俺を見据えた。

こうしてみれば、彼女はかわいい部類に入るのだろう。

30秒ほどしてから彼女が口を開いた。

「あなた、もしかしてココの事知らない？」

無言でうなずき肯定の意を表す。

「もう一つ質問するわ。あなたは死んだ記憶はあるの？」

死んだ記憶！？

冗談じゃない。俺は死んでもいなければ、死んだ記憶もない。なぜそんな事を訊くのだろうか？

俺は少し返答に困ったが、

「いや、ない。その前に俺は死んでいない。」

と答えた。

すると彼女の表情が崩れた、いい意味でなく落胆の表情に。そのまま、また俯いた。かなりショックを受けているようだ。

死んでないと駄目なのかよ。

「そう・・・はあ。やっぱり私って未熟なのかしら。」

「未熟って・・・でさあ、君はいった」

「まあいいわ。この際召喚してしまったからには仕方ないわね。」

わあゝ、軽く無視されてるよ、俺。

いきなり顔を上げて俺の顔を見るなり喋りだした。

どうやら彼女の中で何かが吹っ切れたように開き直っている。

立ち直りが早いというか、少しは俺のことを気に留めてくれよ。

「何自己完結してるか分からないけど、君は誰で俺はどうしてここにいる？」

もう1度さっきの質問を繰り返す。

また無視されるかと思ったが、少し考えた込んだ後に答えてくれた。

「私の名前はエレン・シュグラード。ジョブクラスは魔術師よ。」

名前はなんとなく納得できるが、ジョブクラスで魔術師って・・・
FFの世界にでも来た感じだ。

しかも自己紹介してるだなのに、なんかえらそうにしてるし。

「そしてあなたは私に召喚されたのよ。」

ああ、俺もついにいかれたらしい。

この娘はいったい何を言っただ。
ジョブクラスとか魔術師とか召喚とか・・・。
もう俺の理解できる範疇を超えている。

「召喚って・・・」

その先が続かない。何を言っただいかわからないからだ。
確かに魔術とか召喚だとかは簡単に信じられるものでもないし、信じたくもない。

しかしながら、俺は現実に見知らぬところに飛ばされてしまっているし、彼女がうそをついているようにも思えない。

「とりあえず話はここまでにして外に出るわよ。ここは私の家ではないのだから。」

「え...とっ、オイ!」

「早くしないと置いていくわよ?」

「ちよ、待てよ!」

考え込んでいる俺だったが、いきなり彼女:もといエレンが外に向かつて歩き出したため、ついつい言ってしまったキムタクの物真似。これを知っている人がいたなら俺は赤っ恥をかいていただろう。だが、エレンはそれを知らないらしく『分かったけど、早くそこにある荷物を持ってついてきなさいよ。』と言い残して部屋の外に出た。

俺はリュックを持って急いでエレンを追いかけた。

こんなところに置き去りにされたくないからな。

・・・

俺たちが先ほどの部屋を出ると、そこは協会らしき建物の中だと分かった。

正面に大きなステンドグラスがあり、その前にはこれまた大きな十字架が飾ってあった。

左右には大人が20人座れるほど幅の広い長椅子が10個ずつあった。

そこには人は居らず、不気味なほど静まり返っていた。その中を俺たち2人が歩く足音だけが響いていたのだ。

協会を出た瞬間、俺はわが目を疑った。

マジかよ・・・

何度も目をこすり確認したが、その風景は変わらない。

俺の目の前には大きくて見事なほどきれいな噴水がそこにあり、回りには家々が連なっていたのだ。

そこは街の広場といった感じで人々でごった返している。

足元は全て石が敷き詰められてあり、家も同じような質の石で出来ていた。

俺は古代ローマの地に足を踏み入れてしまった感じだ。

あまりの時代錯誤な風景に見とれていた時だった。エレンが俺に小声で『私の家に着くまで、誰かに何を言われても喋っちゃ駄目よ。』と言った。

静かにうなずいた。それを確認すると、エレンが歩き始めた。俺もその後につづいた。

街は商店の屋台らしきものがたくさん出ていた。

ここは商店街のらしい。売っているものは似たような物だが、ところどころ違いもあった。

街を歩く俺たちを、他の人々は物珍しそうに見ていた。

エレンは他の連中と似たような服を着ているので、注目を受けているのはやはり俺のようだ。

無理もない。

俺の服装は、ズボンは機動性重視型の物を着用しているので、シリコン製で足に張り付いてる感じだ。普通のもはタイツにしか見えない代物だが、俺のは特注品で、間接以外の場所には装甲板として薄い強化プラスチックがついている。見た目はかなり格好いい。色は濃い目の赤だ。

上も同じタイプのもで長袖。これも腕だけだが、間接以外の場所に装甲板がついている。これは紺色だ。このままでは体の防御が甘い。その上からジャケットのような防弾チョッキを着ている。背中には剣と銃が交差した絵が描かれており、その上には『BATTLE WOLF（戦いの狼）』とロゴが書かれている。

これは俺たちのチームロゴだが、とりあえずその説明は置いておこう。

チョッキももちろん赤だ。

これだけの服装をしているのだ。目立たないはずもない。

そんな俺をお構いなしにエレンは黙々と歩いていく。

.....

「どっ？ここが私の家よ。」

俺はエレンが指差す家を確認する。今まで見た家と大して変わらない。

それでも俺には新鮮な感じがする。

「さ、中に入っただけだよ。」

進められるがままに、俺は家の中に入る。

案の定、家の中も石で出来ていた。床には布が敷かれている。きつと絨毯なのだろう。

玄関から中に入り、長めの廊下の先にリビングのような部屋があった。広さは20畳はあるだろう。

正面に大きな暖炉があり、その手前には6人ほどがゆったりと座ることが出来るようなテーブルがある。

「ここで、家族みんなで食事をするのよ。」

エレンはそう言うと俺のほうを見た。

俺は周りを見回す。

広いな。

「それで、こっちが今日からあなたが住む部屋よ。」

今来た廊下を戻り、リビングから見て右手の方にある部屋のドアに近づいていく。

その隣にもいくつか扉がある。きっと他の家族の部屋だろう。

「さ、入って。」

扉を開けたその向こうには、ベットと机が置いてあるだけの広さ10畳の部屋があった。

エレンはそのまま部屋の奥にある扉を開けて言った。

「ここがお風呂とトイレよ。使い方は分かるかしら？」

軽く見回してみる。

多少違いはあるものの、基本的には同じ造りになっていた。

トイレはもちろん洋式だ。

これなら多少我慢すれば住めそうだ。

・・・

は？住む？俺が？ここに？

今更気がついたが、どうやら俺はここに住むとエレンの中では決定されているらしい。

なんでもっと早く気がつかなかったのだろうか？

が、今はそんな事を考えている前に、訊きたい事は山ほどある。まずはそれを説明してもらわないと気がすまない。

「なあ、いくつか訊きたい事があるんだけど答えてくれるか？」

シカトされることも覚悟したが、

「ええ。私もちゃんと説明しないとね。」

普通に対応してくれた。ヤバイ、マジ嬉しい。
とにかく、訊いてみよう。

「えっと、君の呼び方はエレンでいいのか？」

「私はあまりこだわらない方だから、あなたの好きに呼んで良いわ

よ。」

私はって・・・、他に誰がどんな風にこだわっているのか気になるが、今はまじめな話が最重要なので、とりあえず流す。

「それじゃあ、エレン。ここは何て言うところなんだ？」

「一番気になる事を訊く。」

少なくとも俺の時代の日本、いや地球上でないことは確かだろう。

「ここは世界の中心の次元、ハブオブユニバース。あなたがいた次元とねじれの位置にある世界よ。」

「ってことは異世界ってことか？」

「あなたから見ればそうなるわね。」

あまり信じたくはないが・・・、ここは信じないことには話が進まない。

「この世界はね、他の次元の中心にある世界なの。言ってみれば、この世界があるから他の次元があるといっても過言ではないわ。」

「世界の中心か。並行世界なら聞いた事があるけど、ねじれの位置って何だ？」

確か並行次元はあるとかないとか言っていた奴がいたことを思い出す。

俺たちが住んでいる世界と全く同じに出来ていて、同じ時を送っているけど存在する空間、次元が違う世界の事だったな。

だが、エレンの話を聞いている限りでは、それとは違うらしい。

「いい質問ね。あなたが住んでいた次元は、常に他の無限大にある次元と並行に時を刻んでいる。そのため、少しでも隣同士の次元が干渉すれば次元の断層が生まれてしまう事があるの。そこに入ってしまうと、お互いの次元の狭間に吸い込まれてしまい2度と戻ってこれないのよ。」

次元の断層・・・似たような話なら聞いたことあるな。

確かバミューダトライアングルと呼ばれている海域にそんなものが存在とかしないとか。

「ここまでの話はついてこれる？」

「ああ、なんとかかな。」

正直これで手一杯な気もするが、まだ話の本題に入っていない。

「それで、その次元はある世界を中心に存在しているの。」

「つまり、この世界って事か。」

「正解よ。なんだ、見た目より賢いじゃない。」

ほっとけ。

「それで、何でねじれなんだ？」

「そうね・・・」

エレンは少し考えた後に立ち上がり、ここにある机の引き出しを開

けた。

そこには細い木の棒と毛糸がいくつか入っていた。それらを取り出して俺の前に持ってきた。

「たとえばこの棒を今私たちがいる世界、つまりハブオブユニバースとすると。」

そういって、片手で横に倒した状態で棒を目線の位置まで持ち上げた。

そしてもう一方の手で毛糸を持ち、

「シユール アップ」

呪文らしき言葉を発した。

すると、先ほどまでエレンが持っていた毛糸がひとりでに動き出したのだ。そして、彼女が持っている木のおよそ10センチ程度はなれた所で、その気を軸に蛇腹状に巻きついたので。

ここまでされると今の話が嘘かという希望も無くなってしまふ。

「この毛糸があなたたちが住んでいた次元よ。」

「なるほど、ねじれの位置って言うからもっと複雑なのを想像してた。」

確かにこれは、いろいろな意味ではねじれの位置に値するだろう。

「これ以上は、私もあまり詳しくないからはっきりとは言えないんだけど。」

「どうした？」

先ほどまでとうって変わって声のトーンが下がる。

「あなたには悪い話かも知れいけどね、」

なに！？それは是が非でも聞いておかなければなるまい。

「この世界は、他のどの世界とも隣接関係にあるのだけれど、その間の空間がたとつもなく広くて、よほどのことがない限り干渉し合えないのよ。」

・・・えっと、それはつまり。

「もしかしたら、俺は元の世界に帰れないとか？」

「うん。」

あ、駄目だ。目眩がしてきた。

「でも、がっかりすることはないわよ。この世界には他の次元と干渉できる人がいるの。」

「えっと、それってもしかして、」

その言葉にある単語が頭に浮かぶ。

「そつよ、」

『《召喚師》』

「よ。」

「か。」

2人の声がきれいにハモった。

どうやら元の世界に帰る事はできなくないらしい。それを聞いて俺は少し安心した。

「それで、エレンはその召喚師なのか？」

確か俺を召喚したのはエレンのはずだ。だが、彼女は首を横に振った。

「違うわ。私はただの魔術師よ。」

どう違うんだよ。

「じゃあどうやって俺を召喚したんだ？」

召喚師でないのなら、俺が召喚できたことが謎だ。

「それは、あの部屋のおかげよ。」

「あの部屋？」

協会の部屋を思い浮かべる。

「あそこは【召喚の間】と言って、今まで色々な召喚師たちが使ってきた部屋なの。そのため、あの部屋自体に相当な量の魔力がたまっているのよ。本当なら私なんか召喚術に成功するはずがないの

「だけど、あそこなら出来る。・・・はずだった。」

「はずだったって？」

嫌な予感がした。

「本来、多次元から召喚するのは死んでしまった人間だけなの。」

ああ、だから1番初めに俺の死んだ記憶を訊いたのか。

「何で死んだ人間だけなんだ？」

そこは結構重要そうであり気になるところだ。

「それはね、ここで死んだ魂は2度と転生することが出来ないからよ。」

・・・

「だからもしここに、多次元の生きている人を召喚して死なせてしまった場合、その人はもう転生できないの。」

・・・

「それは、この世界だけが他の次元と離れているためよ。例えば、あなたがもっていた世界で死ぬとするわね。その時あなたの魂はその次元ではいることが出来ない。その後、魂はどうなると思う？」

そんな事知るはずない。

「いや、わからない。」

「その魂はね、次元の壁を突き抜けてそこと隣接する並行世界に行き、そしてそこで転生するのよ。次元の壁を突き抜ける際には、膨大な空間摩擦が生じて生前の記憶が全て消えてしまうの。中には例外があるみたいだけどね。」

それは前世の記憶を持っている人の事だろう。

「だけど、この世界には並行世界なんて存在しない。つまり、」

「次元の壁を越えたら最後。2度と戻れないって事か。」

エレンは無言でうなずいた。

「それで、俺は元の世界に帰れるのか？」

これが俺にとって最大の問題だ。

はつきり言ってしまうえば、それ以外はどうでもいい話なのだ。

「Sクラス級の召喚師様に、あの部屋で逆召喚してもらえば、まず間違いなく戻れるわ。」

「エレンじゃ出来ないのか？」

「出来なくはないけど、失敗して違う世界に召喚してしまう可能性の方が大きいわね。」

要は出来ないってことだ。

でも、帰れないわけではないらしいのでよしとしよう。

「で？そのSクラス級の召喚師はどこにいるんだ？」

「今、この世界にはいないわ。」

「は？この女いまなんて言った？」

「え？」

「いま、他の次元に行っちゃってしまっているから。」

「えっと、それって・・・」

「俺は当分帰れないと？」

「ええ、そうよ。」

絶句。

そんな俺を見て、彼女は少しにやつきながら、

「でも、大丈夫。今から2週間後に始まる【ハブオブバトルロワイヤル】に優勝すれば、聖者様がどんな願い事でも叶えてくれるのよ。」

「なんつー適当な大会名だ。」

「私が召喚術をしたのは、この大会のパートナーが欲しかったからなんだけどね。」

「なるほど、つまりその大会を優勝すれば、俺は元の世界に帰れるし、」

「私は、願い事が叶うのよ。」

なんとも都合のいい話だが、今までの話からいけば全て納得できず、しまつ自分に少し驚いてしまった。

「ただ問題が1つだけあるわ。」

なにを言いたいのかわかる。

「これはれっきとした【殺し合い】よ。みんな自分の夢を叶えるためなら、人の命さえも気にしない。」

やっぱり、な。

だが、答えはすでに決まっている。

「いいぜ、俺はそれに参加しても。」

「え？本当に？」

彼女は心のそこから驚いているみたいだ。

普通の人間なら、わざわざ命を落としかるかもしれないものに首を突っ込もうとはしないが、俺は状況が違う。

どうせ何もやらずにいたらこの世界で死ぬのが目に見えている。それなら何もしないで死ぬよりも、帰れる可能性があることをした方がよい。

「ああ、男に二言はない。」

「ありがとう。」

心なしか、エレンの目が少し潤んでいるようだ。俺が断ると思っていたのだろう。

「それで、俺はそれまでどうすればいい？」

「そうね、まずあなたの戦闘力をしれべきやいけないわね。はい、これ持って。」

「ん？」

エレンは俺に斧を渡してきた。

まさかこれで俺と戦うつもりなのか？

それともどこかにモンスターがいてそいつと・・・

「それで私が呼ぶまで、家の裏で薪を割っていてちょうだい。」

いきなりの命令に思わず斧を落としそうになる。

なぜ今の状況で俺がお前の家の薪割りをしなきゃならんのだ！
全く持つて理解不能な女、エレンだ。

「なんで？」

「あなたの戦闘力をチェックするためには、準備が必要なの。それまでの間がもつたいたいでしょ？だから薪でも割ってなさいよ。」

「その理由が分からない。」

「だってそうでしょ？あなたは私に召喚されたのだから、私はあなたのマスターよ？そしてあなたは救世主。」

救世主って映画マトリックスのネオみたいなものじゃないの！？
この世界では救世主って、使い間？メイド？使用人？従者？僕？サーヴァント？それとも召使なのか？

「それじゃ、後は任せたわよ。救世主様」

いや、この世界じゃなくてこの女の中だけだ。

.....

それで今に至る。

全く、どうして被害者の俺が薪割りなんてしなきゃならんのだ。
今思い返してみても、また腹が立ってきた。

何が救世主だ。これじゃあパシリじゃないか。

何かだんだんむかついてきた。

次で薪は100個目だ。

.....

「俺はパシリじゃね〜〜！」

そう叫びながら、怒りの鉄拳でまきを叩く。もちろんグローブや手袋などを付けずに素手でだ。

ドゴン！

今までにないほど大きな音で薪は完全に粉と化した。

これじゃあ薪割じゃなくて、薪潰しだ。本当は割れる程度に力を抜いたつもりなのだが……

怒りの時の拳は制御できない

俺は今日1つ賢くなった。

……ってかあいつまだ準備おわらねーのかよ！

その後も5・6個の薪が粉になってしまったことはエレンには秘密にしておこう。

第02話 救世主はパシリ!? (後書き)

かなり読みにくい文章だったと思います。

そのところの指摘などありましたらぜひお願いします。

第03話 救世主は魔法使い？

今俺の目の前にはどこにでも落ちているような石がある。

大きさは手で握ることが出来るくらいのも物だ。

そして、その石を持ってきた彼女、エレンからとんでもない事を言われたのだ。

「この石を飲み込みなさい。」

石を飲み込めって・・・

ただの普通の人間である俺には無理難題だ。

当然従えるわけもなくハツキリと『嫌だ』と答えたが、『大丈夫、この石は魔鉱石で今はまだ属性ついてないから人体に影響はないわよ。』とか訳の分からないことを言っただけで無理やり食わせようとしてくる。

このサディストめ。

「ストップ！ちゃんと説明してもらってからじゃないと、絶対に納得がいかない！」

口に押し込もうとする腕を抑えて出来るだけ大きな声で叫ぶ。それでもしないとまたシカトされる恐れがあるからだ。

「しょうがないわね。全く、男のくせに度胸がないのね。」

それはもう度胸の範囲を超えてるよ。

「この石は『魔鉱石』と言って、これ自体では何もおきないんだけど、こつやつて魔法の属性を付けてあげると……」

エレンはどこからか、先ほどと同じ石を取り出して手のひらに乗せながら呪文を唱えた。

「シャイニング」

「うおっ！ すごい。」

彼女が呪文を唱えた瞬間、今まで何の変哲もなかった石ころが突然肉眼で直視出来ないほど光り始めた。

「今は“光”の属性を与えたのよ。この魔鉱石は受けた属性のもつとも単純な魔法をほぼ永久的に持続することが出来るの。だから今は光っているのよ。これがもし火だったら燃えて、電気だったら帯電して、水だったらそれを水釜に入ればその水が尽きることもない。理屈は私には分からないけど、まあ魔鉱石とはそういうものよ。」

「それは便利だな。」

だが問題はそんなことじゃない。

俺がそれを食べることで、戦闘力を調べると全く関わりがない。

「だから、早く飲み込みなさい！」

「だからの意味が分からん！」

「私の話を聞いてなかったの？」

「今の話とその魔鉱石とやらを食べるのどこに関係があるんだよ！」

全く、こいつの話は飛躍しすぎる。

ちゃんと1〜10までをしっかり説明してもらいたい。

「だ〜から！この無属性の魔鉱石を飲み込んで体中に入ると、あなたの微弱な魔力に反応して、どの属性が分かるって寸法よ。わかっただ？」

「なるほど。」

理屈は理解できる。

が、どうしてもその石を食べるのには抵抗があった。

そもそも食べた後はどのようなようになるのか、本当に人体には影響ないのか、など数々の不安が残る。

しかし、これを食べなくては全てが始まらない。

そう思ったときには、俺はその石を掴み取り一気に口に運んだ。

「……うっ！」

不味い。

さすがに石がおいしいはずないだろうとは考えていたが、ここまで不味いのは予想外だった。

思わず吐きそうになるが、必死で耐え胃の中に押し込んだ。

ゴクン。

「・・・ふう。言われたとおり飲み込んだぜ。」

少しなみだ目になりながらも話す。

「上出来よ。それで、何か体に変化はない？」

「体に変化？」

目をつぶり体中の神経に集中する。

いつもの体との違いをしらべた結果、

「体温が上がったくらいかな？」

ものすごく単純な答えだった。

「え？うそ、そんなはずないわ。無属性の魔鉱石を飲み込んで体温が上がるなんて。」

「いや、そう言われてもな・・・。」

正直困る。

俺はこの世界についてはまだ分からない。

大体魔鉱石とやらがどんなのかいまだに理解できないのだから。

「・・・」

「・・・」

二人して黙り込んでしまった。

その最中にも、俺の体温はじわりじわりと上がっている感覚だ。

いったいどうしたんだろ？

そう考えていた時だった。

バン！

「ただいま」

勢いのいい音とともに開かれた玄関から、とても元気で機嫌がよさそうな声が聞こえた。

その音に驚いている俺をよそに、エレンはすくッと立ち上がって玄関まで走って行った。

その場にポツンと残されてしまった俺は特にすることがないので、先ほどエレンが魔法をかけた魔鉱石を手にとってみた。

「冷たいな。」

ここまで発光しているのだからってつきり発熱しているかと思ったのだが、そうでもないようだ。

これは地球温暖化を防げる一品だな。

もし元の世界に戻る時はいくつかお持ち帰りしたいものだ。

「それで、彼が私が召喚した救世主なのよ。」

いつの間にかエレンが戻ってきていた。

そして俺を指差しながら、エレンの隣にいる女性に少々自慢げに俺のことを紹介している。

どうでもいいが、人を指差すなよ。

「あらあら、すごいわね。あなたももうそんな事が出来る歳になったのね。」

エレンよりも遥かに年上の女性がしみじみ言う。

「あ、紹介するわね。この女性は私のお母様よ。」

「どうも、始めまして。」

「こちらこそ、娘がお世話になりますね。」

エレンの母親にしては抜けている感じがした。

「ところでエレン？あなた、テーブルの上にあった魔鉱石を知らない？」

母親が尋ねる。

今までの会話が一瞬にして散った、唐突な質問だ。早速俺は自分の存在意義を無視された感が生まれた。

「あの小さな無属性の魔鉱石？」

おそらくそれは今俺が飲み込んだものだろう。

「そうよ、でも無属性ではないわよ。」

「え？」

「はい？」

背筋が凍りつき、ひどい恐怖感にみまわれた。

心の中で何かの警報機が絶えずなりっぱなしになったかのように。

「でもお母様、アレは何の変化もおきてなかったわよ。」

エレンがそう言うと、母親は人指し指を立てて『チツチツチ』と言いながら横に振ってから、

「甘いわね、エレン。アレはね、火の属性を与えた魔鉱石よ。ただね、普通の火を起こす時よりも効果が遅くなるように魔法をかけたのよ。」

いい迷惑だな、オイ。

「そんなの危ないじゃない。どうしてそんなことしたのよ。」

エレンが慌てている。

無理もない。もしかしたら・・・いや、間違いなく俺に食べさせた石がその火の属性付魔鉱石だったのだから。

「私がない間にそれが原因で火事にでもなったら困るでしょう?」

「それは・・・そうだけど。」

「それで?その魔鉱石はどこにあるの?」

エレンはちらりと俺を見た。

俺はというと、ひたいに結構な量の汗をかいている。顔色も赤くなっ
ていて、誰が見ても熱を出していることは一目瞭然だった。

「あらまあ。もしかして彼に食べさせてしまったのね？」

「ええ。」

ああ、やっぱり。

俺が食べたのがそれだったのか。どうりで体が熱くなってきたはずだ。

ヤバイ、目眩がしてきた。

俺はそのまま床に倒れて、意識を失ってしまった。

最近意識がなくなることが頻繁に起きるようになってきたな、俺。

・・・

どれくらい眠っていたのだろうか？

俺は倒れた部屋のベットで目覚めた。

あの時のような体の熱はもう抜けきっている。

手足を動かして、ちゃんと言うことを聞くか確かめる。

「よし、大丈夫そうだな。」

心なしか、眠る前よりもしっくりくる感じだ。気分もなぜかいい。これでさっきまでの出来事が夢だったら良いのに、けど現実わかんないか。

起き上がり、ベットの下にたたんで置いてあった防弾チョッキ兼ジヤケットを着込む。

これが無いとどうもこの格好に締めがない。

コンコン

不意に部屋の扉が叩かれた。

「はい。」

俺は思わず答えてしまった。

そして、俺の返事を聞いてからエレンが中に入ってきた。

「体の方は大丈夫？」

俺の体の心配してくれた！？実はひょっとしてこいつはいい奴なのか？

「ああ、異常はないな。」

「そう、良かった。こんな事で私のパートナーを失って大会に出れなくなるなんて御免なのよね。」

前言撤回。やっぱりこいつ自己中だ。

「あのなあ。もしかしたら俺は死んでたかも」

「ちょっと、さっきの庭に出てきてくれない？試したいことがあるの。」

軽く流された。結構ショックだ。

「ち、分かったよ、今行く。」

もうどうにでもなれだ！

俺は半分やけくそになりながら彼女の言葉に従う。

もうこの世界で生きていくにはエレン、マスターには逆らわないことが一番であると俺は感じた。

どうせ俺が何言っただって聞き入れてもらえないのだから、言うだけ無駄だ。

「で？何するんだ？」

「あなたはそこにたっているだけでいいわ。危ないから絶対に動かないでね。」

「へいへい。」

俺は言われたとつりに庭の隅っこに突っ立った。

いったいエレンは何を考えているのか、残念ながら俺には分からなかった。

彼女はおれの位置を確認すると呪文を唱えた。

「ファイアーショット」

！？攻撃魔法か？

彼女から出されたいくつかの炎の塊が俺にぶつかってくる。

生身の俺は、当然その熱に耐えられるわけなく焼死・・・

「あれ？」

しなかった。

エレンが放った炎の塊は俺にぶつかっただかと思うと、すぐに消滅してしまった。

その後エレンに聞いた話によると、俺は自分が食べてしまった火の属性の魔鉱石のおかげで命を落とす寸前まで行ったらしいが、持ち前の生命力で何とか持ちこたえ魔鉱石を魔法ごと吸収してしまったらしい。それにより俺には炎属性の魔法の耐性がつき、なおかつ簡易炎魔法なら使えるかもしれないようになったらしい。ついさっきまで仮説でしかなかったが、庭でその実証をしたことにより仮説から確信に変わったのだ。

『今回は結果オーライと言うことで許してやるが、次回はこんなことがないように！』と俺が寛大にもそう言ってやったのだが、『何言っているのよ？炎の魔法が使えるようになったのよ？礼は言われなくても文句は言われたくないわよ。』などと逆切れされてしまった。

全くもって不愉快な奴だ。

けど、なんだかんだで今日も疲れたな。

いくらさつき寝たからといって疲れが取れたわけではない。

どうせ明日もこの調子なのだろう。

部屋のランプの火を試しに魔法で消してみる。

俺が魔法を使う時には詠唱は必要ないらしい。心で考えるだけで自然の炎は少し程度なら操れると言っていたな。

消える！

パットすぐに消えるわけでもなかったがそれでも少しずつ光が弱くなっていき、最終的には消えてしまった。

「俺すげえな・・・」

自分を褒めながらベットに入り込む。

今考えれば、確かに魔法を使えるのはいい。

だがそれは、俺が人間離れたことと同じではないのか？

そんな考えが頭をよぎったが、今そんなことで悩んでいては生き残れない。この際は本気で細かいことには突っ込まないと決心しにとな。

「決心か。」

まあいいさ。明日は明日の風が吹くよな。

俺は布団をかけ暗闇の中目をつぶった。

今更だがそういえば俺、エレンのお袋さんの名前聞いてなかったな。でもま、それはまた明日でいいか。
睡魔が俺を襲いその数秒で深い眠りについた。

第03話 救世主は魔法使い？（後書き）

内容が矛盾してないか不安です。

指摘や感想がありましたら是非お願いします。

第04話 救世主の朝

目覚めたらそこは、知らない異世界だった

なんてCMを流せそうなくらいの出来事に巻き込まれた俺だ。

今朝目覚めた時この部屋を確認して最後の希望『夢才子』に賭けたのだが、その期待はことごとく裏切られてしまった。

何度も気絶してたからそれはないか。

夢の中まで何度も気を失うとあつては精神的な病を疑ってしまうので、これはこれでよしとすることにした。

「朝……か。」

部屋の窓からは太陽の光が差ししていて、そこに部屋の埃が浮いているのが見えた。

俺が来る前は結構な時間使われていなかったようだ。

ゆっくりと上半身を起こしてから両腕を上には伸ばして伸びをした。幸いなことに体にはどこも異常はないようだ。

「よし、全然大丈夫だな。」

ゆっくりとベットから起き上がり、自分の服装を見てみる。

昨日、戦闘着のまま寝てしまった事を思い出した。まあ体には異常がなかったからどうでもいいか。

流石にずっとこれを着ているわけにはいかないか。

部屋の隅にあつたりユックを持ち出し中身を探る。

「えっと、確か入ってるはず・・・あった。」

俺が手に取ったのは、綿でできた黒い長ズボンと黒い革のベルト。タンクトップの白いシャツに白いワイシャツ。そして最後に・・・

「ここまで来てこれ着ることになるなんてな。」

それは学ランだった。

俺たちは学校の帰りにあの演習場の行ったので、学校の制服が入っている事は分かっていた。私服も一着なら入っている。

ちなみにこれらの荷物は全て、駅の大型コインロッカーにしまっている。

コインロッカーで便利だよな。

制服に着替えるため今着ている服を脱いで床においておき、ズボンとワイシャツを着た。

とりあえず学ランはい今着る必要がないため、机の椅子の背もたれにでもかけておく。

そして戦闘着に破損箇所が無いかチェックする。

「どうやらないみたいだな。」

何もしていなかったのどこも壊れていないようだ。

「一応何がおきるか分からないからナイフとか装備していくか。」

何か単語がやたらゲームチックになってきたが気にしない。

コンコン

不意に俺の部屋のドアが叩かれた。
一瞬誰が来たか分からなかったが、俺の部屋に来るのはエレンくらいしかいないことが分かり、

「どうぞ。」

部屋の中に入れることにした。

「あら、もう起きていたのね。体の調子はどつ？」

「ああ、悪くない。」

案の定エレンだった。

彼女は俺の服装を見て少し驚いていた。

「あなた、面白い物を着ているのね。」

「これ変か？」

結構不安になる。

「変ではないわ。むしろ似合っているわよ。」

「そう、か。」

制服が似合うと言われても嬉しくない。

「それで、何か用があったんじゃないか？」

「ええ、あるわよ。とっておきの事がね。」

不気味に薄笑いを浮かべたエレンの顔は、いかにも魔女らしかった。嫌な予感がする。

「今日から貴方も私の通う、訓練所の訓練生になるのよ。正確に言えばもうなってるわね。」

「は？」

く、訓練所？

頭の中には軍隊やら自衛隊やらの訓練風景画映る。

実際に見たわけではないが、映画やテレビでは何回も見た。厳密に言えば、マサに何度も見せられた。

マサは『俺たちが強くなるには、軍隊のまねをすればいい。』とかいって真剣に見ていたが、結局何一つ試さなかったっけな。

「訓練所って・・・訓練所？」

「そうよ、訓練所。」

「何を訓練するんだ？」

「何を当たり前な質問してんのよ？そんなの誰でも知ってるわよ。」

いや、俺知らないから。

「俺が知るわけ無いだろ。」

エレンは小さくため息を吐いてから、少々めんどくさそうに話し始めた。

「時間が無いから手短かに話すわね。訓練所は主に二つの棟があつて一つが【知学の棟】でもう一つが【武学の棟】よ。知学の棟では、私たちのような魔術師や魔法使いが魔法の勉強や実習、模擬戦などをしていて、武学の棟ではソルジャーやナイトが武術の稽古したり戦術を勉強したり、模擬戦や色々な派遣に行ったりするのよ。ここまでは分かるわよね？」

「もちろん。」

「それで私は当たり前ながら知学の棟に通っていて、貴方は武学の棟に通うようになるわ。」

「俺は一言も良いと言ってないけど？」

俺に拒否権は無いのか！

「これはこの世界に住む人の義務なのよ。6歳から20歳になるまでは訓練所で訓練を受けなければ行けないのよ。」

「そう、なのかよ。」

どうやら俺に拒否権は無いらしい。

「でも、召喚された救世主が訓練所に行くなんて前代未聞なんだけどね。」

「なぜだ？」

俺だけ？俺が始めてなのか？

ある意味では嬉しいが、訓練所なんて学校みたいなどころには行きたくない。

ましてやこんな何が起こるかわからない世界の訓練所なんて、一体どんな無理難題を強いられるか分かったもんじゃない。

「普通救世主は死んだものを召喚するのよ。それも生きていたころは腕の立つような人を。だから、そんな人たちが20歳前に死ぬなんて事はほとんどないでしょう？」

「それは、まあそうか。」

「それでも貴方は死んでないし、強いかどうかも分からないただの少年なんだから訓練所で訓練するのは当然でしょう？」

「確かに、そうだな。」

後半部分の俺が弱いみたいない言いが少し気に入らないが、エレンの言っていることは正しい。

「分かったわね？貴方は今日から訓練生よ。」

「訓練所の名前とか無いのかよ？」

「あるわよ。」

少し間をおいてから、

「正式名称は【王国立スロトン第1訓練所】よ。この世界の中でも一番大きくて立派な訓練所よ。あなたもそんなところに入れる事を感謝して欲しいわ。」

マジで軍隊みたいだな。

「それで？俺はこれからどうすればいいんだ？」

「とりあえず、転入生は実技試験と戦術試験。最後に模擬戦で各クラス内の順位決めかしらね。順位は半分より少し上くらいならいいけど、それ以下なら許さないわよ？」

「そついわれてもな。」

何か許す許さないの問題ではない気がするけど。

「さて、話も終わったことだし早く準備しなさいね。それが終わったらこつちにきて朝ごはんを食べてから訓練所に向かうわよ。」

「はいはい。」

そついうとエレンは部屋から出て行ってしまった。

全くみがってな奴だ。大体準備って言っても特にすることが無い。せいぜいナイフを磨いたり、銃に弾詰めたり（偽物のため玉はBB弾or直径6mmの鉛球）マシンガンのバッテリーを充電するし事しかない。

だが、ナイフの手入れはもう済んでいるし、チューンアップ違法改造している銃とはいえフライパン程度の鉄を貫通するしか力がないので、鎧などには歯が立ちそうもないし、ここにはコンセントが無いからバッテリー

ーの充電も出来ない。

「どうしたもんかな？」

考えていても時間の無駄だな。

もうこれは準備万端といつてもいい状況なので、早速朝飯を食いに
行くことにする。

こっちの朝飯はいつたいなんだろうな？

そんなことを楽しみにしている俺がいた。

訓練所はいつたいどんなところなんだろうな？

第05話 救世主の訓練所

・・・

俺は今、自室のベッドの上で寝転んでいる。

朝飯を食べた後に『私は少し準備があるから呼びに行くまで部屋で待つてなさいね。』と言われたからだ。

全く、人に準備しろとかいつているが自分はどうなんだよ。

特にすることも無いが一応いままっている物を確認するため、リュックを持ってきて中をあさる。

リュックは武器はあまり入っていない。サバイバル用品の数々と、チーム戦の時に使うトランシーバが6個。俺が腰に付けているものを合わせれば7個ある。

これらもチームメイトの金持ちの後輩に買ってもらった物だ。

あと、落雷から身を守るためのヘッドギア。これにマイクとイヤホンをオプションで付けてトランシーバーと繋げばインカムマイクにもなる。

これの開発者もチームメイトの後輩の工藤って奴だ。

悔しいが全てにおいてチーム内最高のスキルを持ち、俺でさえ喧嘩や試合で勝てない男だ。

ま、負けたことも無いけどな。

他には、ライフルのバッテリーとその予備、充電気にライト。それからナイフを磨くための磨ぎ石に銃の玉でBB弾が18000発に鉛玉が600発、火薬弾は120発。

携帯電話に災害用のダイナモラジオ（携帯充電機能付）と1000mlガスカンが新品3個と使いかけ1個。

そして食材には、防災用の乾パンや缶詰、ラーメンとレトルトカレーがある。

「こんなもんか。」

正直これから戦いに行くには頼りない荷物だ。

マサのリュックには重火器がたくさん入っていて、戦闘面においては困らない。

それこそ人だつて簡単に殺せるようなものもある。

「あのバックも欲しかったな。」

あのバックとは、チームで合宿に行く時に持っていくかなりでかいバックのことだ。

あれさえあれば数日間は野宿が出来る。昨日のサバゲーの時には器具の調整のため持って行ったが、今はもう元の世界でマサが1人で駅に持ち帰ってしまっただろう。

重いんだよな、アレ。

1人で二つの巨大バックは運ぶマサの姿を想像すると少し笑えた。またいつか、あいつと会える日が来るのだろうか？いや、絶対にこさせるぞ。

コンコン

いつの間にか思いに浸っていた俺は、その音で我に帰った。エレンがようやく来たようだ。

「どつぞ。」

返事を聞いてすぐに部屋の扉が開いた。

「お待たせ、じゃあ行くわよ。」

「ああ。」

エレンは、初めて会ったときと同じマントと杖を持っていた。しかし、準備をしたはずなのに手ぶらだった。

「何でエレンは手ぶらなんだ？」

「テブラ？」

どうやら手ぶらの意味を知らないらし。

「あ、いや。どうして何も持っていないんだ？」

「そうか、貴方は知らなかったわね。私たちの世界では魔術師などの人のほとんどはね、異空間に荷物をしまっって運んでいるのよ。」

「異空間？」

また新たな単語出現だよ。

「そうね、聞くより見たほうが早いわね。今から試してあげるわ。」

エレンは杖を両手で横に持ち呪文を唱え始めようとした。その時、

カランカラン

突然大きな神社の鈴のような音が家中に響き渡った。

「なんだ？」

「誰か家にきたみたいね。お客様かしら？」

二人して玄関に向かう。

するとそこには、俺たちと同じ年位の女の子がシスターの格好をしてたっていた。

全身黒い服で身をまとい、首からは十字架のネックレスがぶら下がっている。

「おはようございます、エレンさん。」

「おはよう、ロシエル。こんな朝早くにどうしたの？」

どうやらシスターの女の子の名前はロシエルらしい。

「はい。実はですね、昨日召喚の間に忘れてあった荷物をお届けに参りました。」

「忘れてあった荷物？」

「ええ、そうです。昨日あの部屋を使ったのはエレンさんお一人だけなので、おそらくそうなのだろうと持ってきたのですが。」

「その割には何も持ってないね。」

「え？」「

俺の突然の介入に驚いてしまったらしい。
そして助けを求めるような目でエレンの方を向いている。

「ああ、彼は私が召喚した救世主よ。」

「そうでしたか。驚いてしまつてすいませんでした。」

「いいよ、謝ることじゃないって。」

「ありがとうございます。」

にっこり笑つて俺にお辞儀をした。

シスターだけあつてなかなか礼儀正しい子だ。

エレンもロシエルの半分で良いから、もう少し礼儀が身につけて欲しいと切実に思う。

「それで？その荷物はどれなのかしら？」

「いまだしますね。」

そういうとロシエルは小声で何か呟いた。その瞬間、彼女の後ろの空間に亀裂が入り一人一人が入れそうな穴が開いた。

「これですね。」

ドシン！

大きな音とともにその穴から大きなバツクが落ちてきた。

荷物を吐き出した後、穴は自然に消滅してしまつた。おそらくエレンも同じ事をさっきしようとしていたに違いない。

「何よこれ？私の物じゃないわよ。」

エレンは地面に落ちてあるバックを見下げながら自分のではないと言った。

俺もつられてその荷物を見る。

あれ？これってひょっとして!？

「そうですか。それならいったい誰ののでしょうか？」

「えっと、すみません。これ俺の荷物です。」

「あら、あなたのなの？よかったじゃない、届けてもらえて。」

「まあな。ありがとうな・・・えっと、」

「ロシエルで結構ですよ。」

「ありがとう、ロシエル。」

「わざわざ届けてもらってすまないわね。」

「いえいえ。それでは私は戻りますね。お二人とも神の御加護がありますように。」

ロシエルはそのまま協会の方に歩いて行ってしまった。
この世界にも礼儀正しい人はいることが分かった。

「じゃあ、俺はこれを部屋に運んでくるから。」

「早くしなさいよ。あまり時間が無いのだから。」

バックのもち手を両手で引っ張る。

軽く50kgはある荷物のため、勢いを付けて運ばなければいけないので少々疲れる。

しかしまあ、これで当分の間の生活は安泰だ。これの中には色々なサバイバルグッズが入っているし、なんといってもガソリンと小型発電ダイナモがあるのは心強い。

バッテリー充電の問題はこれで解消されたからな。部屋に荷物を置いてから玄関に戻る。

「さあ、行くわよ、準備は出来ているでしょうね？」

「ああ。ばっちりだ。」

とか言ってるが、実際はハンドガン1丁とサブマシンガン1丁、ナイフ一丁しか持っていない。

流石に学ランを着ているので装備できる武器が限られてしまっただ。

「それじゃあ、道に迷わないようについてらっしゃい。」

「分かった。」

・・・

歩くこと数分。

俺たちの目の前には大きな門が口を開けて待っていた。

でかい。

「ここが訓練所よ。貴方は右の武学の棟、私は左の知学の棟。何か分からないことがあったら近くの教官にでも聞きなさいね。それじゃあ、また後会いしましょう。」

「って。オイ！俺を1人にするなって・・・」

いつの間にかエレンはもういなくなってしまった。

「全く、薄情な奴だな。」

1人愚痴をこぼしつつ、改めて訓練所の建物を見てみる。

門から入りまらず目にするのが大きな時計塔。高さは100メートルはありそうだ。

そしてその塔を中心にきれいに左右対称に分かれている建物が二つある。

外壁は全てコンクリートのような石で出来ており、色は灰色に統一されている。パット見たとどこかの幽霊屋敷にでも見えてしまう。その建物を囲む壁も半端無く高い。10メートル以上の高さでとても登っていけそうに無い。

その時だった。建物に見とれていた俺の後に、突然何かがぶつかった。

ドン。

「キヤッ！」

「おっと。」

誰かが俺背中に突っ込んだらしい。

「ご、ごめんなさいです。」

「あ、いや。俺は大丈夫だけど、君は？」

俺は振り返り、ぶつかってきた奴を確かめる。

「わ、私も大丈夫です。」

「それはよかった。」

そこにいたのは、俺よりも2〜3歳年下の女の子だった。彼女は一回お辞儀をして俺に向きかえり、

「あ、あの、それじゃあ私急ぐので、しっし、失礼します。」

「あつと・・・」

ものすごい勢いで行ってしまった。

参ったな、どこに行けばいいか聞けばよかった。

彼女が走っていった方角は武学の棟ではなく知学の方だった。

どうやらエレンと同じで魔法タイプなのだろう。

まあ、いくらなんでもあんな小柄な女の子が前線で戦うはずも無いか。

俺はとにかく武学の棟を目指して歩き始めた。

門からはおよそ1Kmは離れている建物に歩いていくのは少ししんどいが、そんな事では訓練などやっていられないだろう。

一度立ち止まり両手で頬を叩く。

うっし！

気合を入れて再び歩き出そうとした時、

「うおおおおおおおお、きゅうにとまるなあああああ！」

威勢のいい掛け声とともに、後ろからハイスピードで人の男が俺に向かって突進してくる。

接触推定時間1.6秒……

俺はコンマ9秒のスピードで男との衝突を回避した。

男はそのまま走り去り……目の前の木にぶつかつた。
ズドォーン！

「いつてええ！」

うん、本当に痛そうだ。

木の幹にはくつきりと男が衝突した後が残っている。

そしてそいつは俺の近くまで小走りでちかづいてきた。

「お前、いきなり止まったら危ないだろ。」

第一声がそれかよ。

「ああ、悪い悪い。」

だが実際俺がいなくても木に衝突していたのは間違いないだろう。彼の背は俺と同じくらいだ。髪は金髪だか少し黒い。黄土色といったほうが無難だろう。

背中には大きな両手剣がある。鎧は着ていないが、おそらく戦士か騎士だろう。

「うん？お前見ない顔だな。」

「そりゃそうだ。初めて会ったんだからな。」

「アハハハ！確かにそうだな。」

結構気さくな奴だな。

「気に入った。俺の名前はアンドロイ・クロウ。ジョブクラスは騎士……を指している傭兵だ。よろしくな。」

「俺の名前は雲雀千夜だ。」

お互い近寄って握手をする。

「俺のことはロイって呼んでくれよな。」

「分かった。」

ロイの手はごつごつしていて、確かに戦う男って感じがする。見た目もまじめな顔さえすれば、俺の世界でカツコイイ外人さんだ。

「ところでお前のジョブクラスって何だ？見た目じゃ全く分からないが。」

「正直なところ俺も知らない。」

ロイは少し驚いたようなあきれたようなどちらとも判らない顔をした。

こんな奴でもそんな顔が出来るのだと感心してしまう。

しかし、その顔も長くは続かずに、すぐにさっきまでの笑い顔に戻った。

「ほんとにお前って変わってるよな。」

ほっとけ。

「ま、それは追々訊くとして、だ。俺が呼ぶのにお前はヒバリがいとか？それともセンヤか？」

「・・・どつちでもいいよ。」

千夜といわれたとき少し胸が痛んだ。とっさにマサのことが頭をよぎったからだ。

そんな俺の心境をロイが気がつくはずも無い。

「よし！じゃあお前の事はセンヤって呼ぶな。」

「ああ。」

まあ、今そんな悲観的に名つても仕方が無い。

俺は今ここで生きているのだから、出来る限り自分に出来ることをしよう。

どんな結果になるうとも・・・な。

「ところでセンヤ。お前足の速さには自信あるか？」

「あるけど、それがどうした？」

「うっし！それじゃあ俺について来い！！！！」

「つて、オイ！」

基本的にここの世界の人間は人の話を聞かないらしい。

俺の質問には答えずに全速力で走り去るロイの背中を見ながらつくづく思う。

とりあえずついていくしかないか。

幸いなことに、ロイも武学の棟に向かっている。

事務室や教官室のようなどころがあるかをあとで訊けばいい。

俺は全速力で奴の背中を追いかけることにした。

だが、この時の俺には知るよしも無かった。この後に死に迫る出来事が起こるうとは・・・

変な伏線もいいけど、あいつ足速すぎだろ!!!

第06話 救世主と闘技場（前書き）

更新が遅れてしまいました。

不定期更新ですがどうかこれからもよろしく願います。

第06話 救世主と闘技場

「また遅刻したのか、アンドロイ!！」

「す、すいません。ちょっとした諸事情があったもので、」

「言い訳なんか聞かん!そんなことより、約束は覚えているのか?」

「いや、聞いてくれ・・・ださいよ。」

武学の棟の講義室のような部屋にロイと一緒に入ったとたん、ものすごいけんまくで怒られている。

ロイを怒鳴りつけているのは、背が高く体格のいい中年のおじさんだ。

どうやらこの教官の中の1人のようだ。

話の内容から察するにロイは遅刻の常習犯らしい。

「ちゃんとした正当な理由なのかね?」

「はい!そりゃあもう、ばっちり。」

くるりと回れ右をして俺に向きかえる。

嫌な予感がした。

「こいつが道に迷ったみたいだったので、ここまで案内してあげました。」

とか、さらりと言ってくれる。

この説教に俺を巻き込まないでくれよ。

しかも、自分でついて来いとか言っておきながら案内したはないよな。

「君はいつたい誰だね？」

「えっと、俺は・・・」

言葉に詰まった。なんて答えればいいのか分からないからだ。

エレンは俺のことを何にも伝えていないのだろうか？もしそうだとしたら、俺はかなり危うい立場にいることになる。

だがエレンのことだ。何も伝えずに俺をこんなところに連れてくるはずもない。

試しに訊いてみるか。

「俺のことエレンから聞いてませんか？」

「エレン？」

教官らしき男は腕を組みながら考え始めた。

訓練を怠っていないのだろう。鍛えられた二の腕の筋肉なんて半端なくくらいに立派だ。

力では到底かなわないだろう。

「君の言うエレンとは、知学の棟の生徒である【エレン・シュグラード】で間違いないのか？」

「はい、間違いないと思います。」

ザワザワ

エレンの名前が出た瞬間、講義室内が騒がしくなった。

『エレンって、あのエレンか？』

『シユグレードってんだから間違いないねえだろ。』

『あいつと知り合ってたことは……』

『もしかしてこいつ強いのか？』

『まさか、こんなへんてこりんの格好してるやつが強いわけねーよ。』

『そうだよな。ただの知り合いだよな』

『あつたりまえだろ。こんな奴なんかエレンを持ってかれてたまるか！』

ザワザワ

……なんだ？こいつら、

ここにいる連中が何を話しているのか分からないが、会話のところどころにエレンが関わっているのは間違いないようだ。

俺が不思議そうに部屋の中を見回していたらロイがいきなり後ろから肩に手を回してよっかかってきた。

「なんだよ？」

「お前、エレンと知り合いなのか？」

「ああ、そうだよ。」

「何でもっと早くにそれを言わないんだよ！」

肩にもたれかかったまま大声を上げる。

結構うるさいので引き剥がそうとするが、奴の力も強くなかなか離れない。

「エレンがどうかしたのか？」

「どうもこうもエレンだぞ、エレン！エレン・シユグラードと言えば成績優秀、実力ありの派遣ではいつも戦績が一番高くどこに出しても恥ずかしくない魔術師で、この訓練所の知学の棟の主席だぞ！自分より弱い男の顔どころかファーストネームの一字すら覚えなような奴だぞ！？しかも容姿は抜群に良し。お前のような奴がどうして知り合いになれんだよ！」

1人暴走するロイをどうにか引き剥がし、部屋の中に押し込む。

まだ教官との話が終わっていないのだからそれまでは静かにしてもらいたい。

「そうか、君が彼女が言っていた【この訓練所の武学で一番強い男】か。」

・・・は？

「えっと？」

「それでは君にはその肩書きが本当に正しいかどうかを見極めるために、この武学の棟が誇る最強の奴、つまり武学の主席と模擬戦をやってもらうぞ。」

その瞬間、今まで騒がしかった講義室が一気に静まり返った。

彼らの顔は血の気が引いてしまっていて今にでも倒れてしまいそうなオーラを放っている。

アレだけ暴走していたロイ出さえ、他の連中よりはましなものの黙りきってしまったている。

いったいどうしたのだろうか？

それも気になるが今は自分の、ある意味最悪に嫌な誤解を解かなければ。

エレンのやつが妙にえらそうにしている理由が分かった。

それゆえ、自分の召喚した者が他のやつより弱いことが許せないのだろう。

だが、俺はそんなくだらないプライドのためにヘンな誤解を生じさせたくはない。

ここはしっかり否定せねば！

「それでよいか？」

「良いも悪いも、俺そんな強くないですよ。あいつが勝手に言い出したホラ話ですよ。」

「ふむ、なるほど。」

「だから、俺にはそんな奴と戦って勝つ希望すらないですよ。だからもつと違うものを・・・」

「よし、分かった。」

どうやら分かってくれたようだ。

エレンには悪いが、俺もそんなたいそれた肩書きなどこれっぽっちも欲しくない。

なにはともあれ、これでそんな化け物のような奴と戦わずに・・・

「奴らは二人そろってこそ最強になるのだからな。1対2では力が図れん。今までに無いことだが、この模擬試験はペアの勝負にする
！」

すんでねー。

しかも自体は悪化してるし。

「そうじゃなくてですね、」

「それで、その模擬戦で君と組むのは・・・アンドロイ、お前だ。」

「えええええええええ！！！？おれなのかああああああ！！！！！」

この世のものとは思えないほどのデス声で叫ぶロイ。

そんなにヤバイ相手なのだろうか？

「遅刻をした処罰が模擬戦なんて楽で良いだろ？それとも、闘技場の清掃を1週間1人でやつても良いのか？」

「くっ！」

「決まったな。君の名前はなんて言うのかね？」

「雲雀千夜です。」

「ではヒバリ。君の実力を楽しみにしているよ。彼らのコンビは王室の護衛兵と変わらないかほどだからな。存分に戦って来い。」

「いや、ですから・・・」

「それじゃ、準備はしておく。今から30分後に闘技場まで来るように。場所はアンドロイに教えてもらえよ。武器の持込に制限はない。無論、種類も不問だ。武器が足りないようなら倉庫から持ってきてかまわないぞ。」

「そうじゃなくてですね・・・」

「それでは、また闘技場で会おう。」

「ちよ・・・」

行っっちゃったよ、オイ。

本当にこの世界の人間は人の話を聞いてくれないようだ。

まさか人を教える立場である教官もそうだとは思わなかったがな。

もうこうなったら、おれはその最強コンビとやらと戦わなければいけなくなってしまったようだ。

まためんどくさい事になったが、こうなったらどうにでもなれだ！後は放心状態のロイを元に戻して闘技場に向かうだけか。

鎧の敵相手には役にたたないだろうけど、一応銃のメンテナンスもしておくか。流石に武器がこれだけでは頼りないので、倉庫とやらから持ってくるまでだ。

「おい、ロイ！しっかりしろ。とつとと倉庫行って武器調達してから闘技場に向かおうぜ。」

「センヤ。お前、恐くないのか？」

「ん？べつに、相手の実力が分からないのは不安だけど、別に恐くねーよ。」

「はあ、これだから素人は困る。」

ため息をつき両手を腰に当てて、明らかに疲れたような態度をとる。

「いいか？奴らはもう訓練生の力じゃない。それこそ今からだって戦士や、悔しいけど騎士にだってなれる実力がある。そんな奴らと戦うんだぞ？」

あきれた顔をおれに向けて、少しとがった口調で喋る。

「俺だつて、そこそこは自信あつたんだ。腕が立つな。でも、そんな自信は奴らと戦って木っ端微塵に吹き飛んださ。ぼろ負けって訳ではなかったけど・・・俺じゃ勝てなかった。」

「ロイ。」

「だから、俺はまたそうなるのが怖い。」

さっきまでの元気はどこへ行ったのか、こいつに似合わない弱気の発言をしてくる。

俺自身、そのコンビの実力はもちろんロイの力すら分からないからかける言葉が見つからない。

こんな時に下手な慰めはかえって傷つけるだけだ。

「なんだ、そんなことか。」

「そんなことつてな、簡単に言うなよ。」

「だってそうだろ？これで勝てれば名誉回復はもちろん、一気に主席になれるんだぜ？そんなこと忘れるだけじゃ足りないほどのおつりがくるさ。」

「センヤ。」

「なにシケタ面してんだよ、お前らしくないぞ。ホラ、さっさと倉庫に案内しろよな。」

「・・・ああ、そうだな。こんなキャラ俺じゃねえよな。よっし！
いっちょ張り切って、他のクラスの女の子たちに俺の名前を覚えさせてやるぞ」

完全復帰だな。

張り切るロイに先導されながら、俺は武器がしまつてある倉庫へと向かった。

25分後

俺たちは選手控え室のような場所で待機している。

先ほど倉庫から持ってきた武器【カッターソード】というらしい、なんともまあしょぼい片手剣を磨いている。

名前のとうりに、カッターナイフの刃を大きくしてそれに取っ手を

つけた感じの武器だ。

切れ味はよさそうだが物理的ダメージはあまり期待できないだろう。何よりカッターナイフ同様刃が弱い。

ロイは自分の剣、今まで背中にしよっていた大きな両手剣の整備をしている。

刃を研いでから剣の整備専用のオイルらしき液体を塗り布で、それを伸ばしながらふき取っている。

そうすることにより切れ味が増すそうだ。

整備をするロイの顔が真剣そのものだ。本気で負けないように努力しているのだろう。

先ほど言っていた『女の子たちに名前を覚えさせる』と言うことは実現させようとしているに違いない。

そりゃ、アレだけのギャラリ（見物人）がいたらみつともなく負けるわけにはいかねえよな。

ここの控え室に入る前に、俺たちは闘技場を見に行った時だった。

闘技場は意外と広くサッカー場ほどの広さがあり、観客席らしきものがバトルフィールドを囲っている。ちょうどヨーロッパのコロセウムみたいな感じのものだ。

その観客席には沢山の人が座っていた。まるで何かのショーを見るかのように笑いながら語っている。

きっと誰も俺たちが勝つなんてこれっぽっちも考えていないのだろう。

ロイの情報によると、闘技場の裏では誰が勝つかを当てるゲーム（賭け）をやっているらしく、オッズ（倍率）は相手チームが1・03倍で俺たちが3・65倍だと。

今のところ俺たちの方を選んだのは、知学の生徒2人だけと言っていた。

ずいぶん甘く見られたもんだな。

そのせいではないが、この状況を見てロイ同様に俺もやる気が出てきた。

始めは嫌だったが、これで勝てればこの世界で主席デビューという輝かしい栄光が待っていると思えばいいか。

「センヤ、準備は良いか？もう時間だから行くぞ。」

左の胸から手にかけての鎧らしきものをまとい、それ以外には何も防具を付けずに剣を持ち上げながら俺に確認する。

「ああ、ばっちりだ。よし、行くか。」

俺はもつとひどく、防具類は一切身に着けていない。きているのは学ランだけだ。

火薬玉の玉を装填したハンドガンと鉛玉装填のマシンガン。ナイフに倉庫から持ってきたカッターソウドを持ち、闘技場の入り口の扉に向かう。

「言っておくが俺も雑魚じゃない。センヤならないと思うけど、俺の足を引っ張ることはするなよ？」

「大丈夫とは言い切れないな。何せ初めての戦いだからな。」

「アハハハ、それなのにその自信はスゲーな。」

ロイは笑いながら『気楽に行こうぜ、どうせ負けるのは確定してるだから精一杯戦おう』などとカツコイイ台詞を吐いて、自分自身の頬を両手で2度叩いた。

彼自身の気合の入れ方だろう。
そして、闘技場に入る。

マサ、俺たちの戦争ゴツコの成果をここで見せてやるぜ。

心の中で、この世界にはいない親友に話しかける。

それだけで少し心が落ち着いた感じがするから不思議だ。

大きな岩で作られた壁にある木で作られた扉を開け土ので出来た闘
技場の土を踏む。

この何メートルも離れた先に、その最強コンビとやらがいる。

俺がこれから先、エレンの言う殺し合いをするなら

.....

この戦いは負けるわけには行かない！

「行くぞおおおおお！」

「おおおおおおお！」

気合を入れるため二人して大きな声で叫んだ。

その声は闘技場ないに響き渡り、何秒間か耳に残っていた。

俺は、この世界に来て始めて戦いをしようとしている。

.....

今更ながら、そういえば俺エレンに名前聞かれたことね！。

ロイが言っていた話のとおり、自分より強いやつの名前しか興味ない
ようだ。

こうなったら地球の代表として、この戦いで勝って俺の名前を覚え
させてやるぜ！

第06話 救世主と闘技場（後書き）

次回は文が長くなるため前後編にする予定です。
感想などがありましたら是非お願いします。

第07話 激闘！？救世主VS武学の主席 前編（前書き）

更新だいぶ遅れてしまいました。
すみません・・・

第07話 激闘！？救世主VS武学の主席 前編

眩しい……。

今まで暗闇の控え室にいたため、目が外の明るさに慣れていない。

ロイも同じなのか目を細めながら観客席を見回している。俺もつられて何気なく見回していると、よく知った人物が俺の視界に入った。

そう、エレンだ。

そして、その隣には先ほどぶつかってきた少女も一緒に座っていた。彼女たちは知り合いのようだ。

「センヤ……来たぞ。」

ロイが視線は向かい側の控え室に向けたまま冷たい声を俺に向ける。その方向に視線を移す。

そこには人影が2つあった。

1人は身長が190cm以上はある体格のいい大男だ。

彼は棒術使いのようで武器は黒い鉄で作られた長棒に見える。髪は黒でやや長めだ。見た目はアジア系の姿をしている。

この人間が全員西洋風だと思いついて俺には新鮮味がある人だ。しかし、顔は東洋風なのだが彼が体中にまとっている鎧は、よく漫画などで見る西洋の騎士のものだ。

ところどころ変形してしまっているので相当使い込まれていることが伺える。

もう1人の男の身長は相方よりは低い180前後だろう。それでも

俺よりも高い。

見てくれはただの戦士にしか見えない。

右手に刃が漆黒に輝いている片手剣（刀系の物ではない）が握られていて、左肩には黒い鉄でできている長さ2mほどのチェーンのよ
うな物が巻きつけられていた。

雰囲気からして防具ではなく武器だろう。

この男もロイ同様黄土色の髪で、肌白の美形外人だ。

大男とは違い防具は何も左腕に固定された縦長の盾だけで、鎧は装
備していない。

「こいつらか？今日の俺たちのあいてつてのは。」

「そのようですね。」

大男のがさつな言葉に対して美形外人は丁寧な喋り方だ。

「アンドロイと・・・誰だ、あいつは？」

「新入りでしょう。今日の模擬戦の目的は彼の力量を測るためだと
言っていたでしょう。」

「わりいわりい、聞いてなかったぜ。」

「いつものことですが、このままその調子でいきますといつか死にま
すよ。」

「かもな。ガハハハハ！」

何か俺たちが戦う相手のイメージが壊れたな。

ロイの話を聞いているかぎりじゃ、もっと狂戦士的な連中かと思っ

ていたのだが目の前のコントのようなものを見てるとそんなに強
いやつらではないきがしてきた。

が、そんな考えはすぐに間違いであることに気づく。

『両選手前へ！』

審判らしき教官の声とともに俺とアンドロイ、向こうの2人組も闘
技場の中心にやってくる。

『これより、新入生の模擬戦を行う。』

・・・

『勝敗はどちらかのペアが降参するか戦闘不能になるかで決める。』
デスマッチか。

『時間は無制限。各自好きなように暴れてくれてかまわない。ただ
し！殺しはするなよ。』

・・・

『この模擬戦の相手は、“ムド・ロトーペン”と“フグ・スタカム
”だ。』

どこかで聞いたことのある名前だな・・・。

『それでは・・・試合開始！！』

ワアアー！

教官の開始のかけ声とともに観客席の方から色々な罵声が飛び交っている。

俺たちは武器を構えながら相手に向き合う。だが奴らは身構えもせずになにか話している。

「どうするよ？俺はどっちでもいいけどよ、フグはアンドロイドと殺り合いてえーんだろ？」

「ムド、貴方が譲ってもらえるのなら私は是非そうしたいです。」

「決まりだな。俺は新入りと戯れてるから、アンドロイドは任せませー！」

「わかりました。」

と、どっちが誰を倒すか決めている。

やつらの中では俺たちが勝つことはないらしい。

むかつくな。

身構えてる俺たちに最初に動いたのは美形外人、フグだ。

やつは、ハイスピードでロイとの間合いを縮めると手に持っていた剣で切りかかった。

「くっ！」

キーン！

気持ちのいい金属音が鳴り響く。
いきなりの奇襲に驚いたものの、フグの攻撃を手に持っていた剣で弾いた。
ただの人間なら即死だろうその攻撃を、無駄な動きなく弾いたロイは結構な強者だろう。
弾かれたフグは少し下がりがり5mほどの間合いをあけてロイと対峙している。

「アンドロイ。貴方の相手は私がします。」

「なめんなよ！そう何度も同じ武器に負けるとおもうなよおおお
おー！」

フグの発言が癪に障ったのか剣を下に構えて突進していく。

キーン！ガン！シャキ！ガツ！キーン！

二人は何度も剣を剣で弾きあいながら、奥の方に移動していく。
これではせつかくのペアの戦いという名目が意味がない。
残された俺はとりあえず目の前の大男、ムドと対峙する。

「お前が何なのかはしらねえが、速攻でぶっ飛ばしてやるぜ！」

「・・・」

俺は無言で剣を構える。

「と言いたいところだがな、俺たちはお前の実力を測らなきゃいけないんだよな。」

「なんだよ、手加減するってことか？」

なんだかかなり過小評価されているようだ。

「まあな。が、それでもお前のような“ヘツポコ”の“雑魚”には負けるはずねえけどな！」

この俺がヘツポコで雑魚だと？

「んじゃ、行くぜ！せいぜい死なねえように頑張れよ。ま、無理だろうけどな。」

「・・・そうかよ。」

俺は怒りのこもった眼差しで奴を睨む。

ヘツポコだの雑魚だのと言われたのは生まれて初めて受けた屈辱的な言葉だ。

許せない・・・

ムドは手に持っていた長棒を勢い良く地面に突き刺した。

そして、何も持たずに俺に突進してきた。

「まずは素手でいたぶってやるぜえ！」

どうやら素手で俺を倒すらしい。

馬鹿なことを考えたものだ。この俺が丸腰の奴相手に負けるはずがないのに。

相手の実力を知らずに甘く見たことを後悔させてやる！

俺は構えをとき、ただ突っ立っている体制になった。

「ふははは！怖気づいて体がうごかねえのか！坊や？」

「・・・」

ブウン！

ムドのパンチが空を切る。

当たれば常人なら即死であろうその攻撃をかわす。

「なん・・・だと？俺の拳がかわされたのか！？」

「どこ狙ってんだよ？俺はここだぜ、ムドさんよ？」

「この、クソガキヤア！なめやがって〜！」

ブン！ヒュツ！サツ！シュツ！

俺に挑発されて怒ったムドは、その巨体からは想像も出来ないほどのスピードで俺にパンチのラッシュを放つ。

それを俺は何事もないかのように突っ立ったままよける。

奴にとってこれ以上の屈辱はないだろう。武学の主席と謳われた人がただ立っている人間に攻撃が当たらないのだからな。

「ホラホラ。そんな攻撃当たらないよ？」

「うをおおおおおお！」

ストレート系のパンチからフックやアッパーなども使い始めた。だが、所詮はそこまでだ。その攻撃が俺に当たることはなかった。

「くそっ！どうして当たらないんだ！」

「弱いからじゃん？」

俺のその一言をきっかけに、ムドの動きが止まった。そして俯きながら何かぼそぼそと呟いている。

「お……い……」

「なんだ？」

「この俺が弱いだと！ふざけるなあああ！」

どうやらキレてしまったようだ。

こんな挑発に乗るなんてなんとも精神が弱い奴だな。

「うをおおお！」

先ほど地面に刺した長棒を手に取り気合を入れているのか、雄叫びを上げている。

すると、今まで真っ黒い色をしていた長棒の先のほうが一部赤く変色し始めた。

なんとそこから煙まで出ている。

「やっと本気か？」

「このガキ！俺の本当の恐ろしさを思い知らせてやる！」

流石に相手が武器を持ったため、一応剣を構える。

ヒュッ！・・・ジユウ・・・

「おいおい、マジかよ。」

ムドは俺に勢い良く近づき、長棒を軽々と回転させて俺にめがけて殴りつけてきた。

それを手に持っていたカッターソードで防ぐ・・・はずだったのだが、赤く変色した部分に刃が触れたとたん、熔けてしまったのだ。そのまま奴の長棒を俺の右脇にギリギリ触れない程度に回避した。そして空ぶった奴の棒の先端が闘技場の地面の土に当たった。

ジユワア〜！

すさまじい音と煙を出しながら、長棒が当たったところの土に含まれていた鉄が一気に融解してしまった。

あの先端は相当な高温だろう。生身の人間に触れたら一発で蒸発してしまうだろう。

「ビビッタか？これが俺様の力だ。」

武器の性能を自分の力だと主張する。

「この武器はな、魔宝石で出来てんだよ。魔宝石ってのはな、魔鉱石よりも優れている属性魔法が出せるんだよ、好きな時にな。これは炎属性を与えてるから、かなりの鉄なんて簡単に熔かすほどの威力があんだよ！」

武器の性能を教えるなんて馬鹿な奴だ。

しかしいくら武器の性能が分かったとしても、こんなものに触れたりしたらいつかんの終わりだ。気をつけて回避に専念しなければならなくなってしまうた。

これでは攻撃できない。

「まだまだいくぜ！お前は死なない程度に殺してやるよ！なんせ初めて俺に恥をかかせた奴だからなあ！！！」

そう言うと、今度は突き攻撃をしてくる。

槍ではなく先に刃はついていないが、それ以上の威力を持っていることは分かる。

奴の突きは正確に俺の急所を狙ってくる。

俺はその攻撃をギリギリの感覚でかわす。先ほどのパンチ攻撃よりも倍以上の攻撃スピードのため、スムーズに避けることが出来ない。

「オラ、オラ、オラオラオラア　　！！！」

「くっ！」

避ければ避けるだけ奴の攻撃スピードは増していく。

この間合いは危険だ。

そう判断した俺は、奴が長棒を引く瞬間におもいつきり後ろにジャンプする。

これで安全なはず・・・

「甘いぜー！」

だったのだが、ムドは長棒を引くと見せかけてそのままの体勢で俺に体ごと突っ込んでくる。

しまった！

俺は今ジャンプで後ろに飛んでいる瞬間だ。もちろん足は地面についでいない。

そして奴の長棒の先端は、身動き取れない俺の胸部に狙いを定めて今にも突こうとしている。

その瞬間を俺はスローモーションで見っていた。

このままでは刺されてしまう！

予想接触時間およそ0.6秒。

こうなれば一か八かだ！

浮いている状態で体を後ろにのけぞらす。

もともと奴の狙いどころが高い位置だった為何とか俺はその攻撃をかわすことに成功した。

ズシャアー！

だが、おもいつきり後頭部から地面にスライディングしてしまった。多少痛いけど、命が助かったのでよしとしよう。

「ちっ！はずしたか！」

ムドはかなり悔しそうだ。

こちらの試合を見ていたものもほぼ100%当たると思っていただ

ろっ。

それだけ俺はやばかったのだ。

「あつぶねえ。」

すくツと立ち上がり服に付いた砂埃を掃う。

ムドとの間合いはおよそ6mくらいだ。

「次ははずさねえからな！」

言うが早いまた突きの連続攻撃が始まった。

が、今回は突きだけではなく左右からの殴りや上から振り下ろすなどの攻撃も追加されていた。

流石の俺もそんな攻撃を完全に回避することが出来ない。

このままでは殺られる！

そして、ついにその時がきた。

追い詰められた俺に大きく間合いを縮め一気に顔面を突く。それを回避する為に後ろにのけぞった時だった。

「おらよー！」

奴は俺に足払いを食らわした。

予期していなかった攻撃を食らっ俺はなすすべもなく地面に倒された。

「これでトドメだ！」

ムドは俺にトドメを刺そうと渾身の力で倒れている俺に向かって、

長棒の高温部分を殴りつけてくる。

「く、そっおおおお！」

普通の奴ならそこで諦めていただろう。だが残念ながら俺は異常な人間だ。

振り下ろしてくる奴の長棒が顔面に当たる直前に、俺は素手でそいつを受け止めた。

腕がなくなる覚悟は出来ている。命がなくなるよりましだ！

だが、長棒を受け止めた俺の手は蒸発どころか火傷すらおこしていない。

その状況に俺どころかムド、そして観客である訓練生たちも一斉に静かになってしまった。

「うそだろ……。俺のこいつを素手で止めるなんて……」

何かなんだか分からない。どうして俺の手は無事なのだろうか？
頭の中に疑問符が浮かぶ。

だが、すぐにその原因が分かった。

「そうか。俺は炎属性の攻撃はきかないんだ。」

「なん だと？」

そう。答えは簡単だ。

昨晚エレンに食わされた魔鉱石のおかげで俺は炎属性に耐久性がついたんだ。

そして奴の武器が魔宝石とやらが発している炎属性魔法。俺に効く

はずがない。

この勝負・・・もらった!!

「お返しだ！ たっぷり受け取りやがれえ!!!」

俺は奴の起き上がると、奴の持っていた長棒を奪い取る。そして、発熱している方をムドに向け、

「そろそろ決着つけようぜ？」

「くっくっ・・・」

すっかり俺に怯えてしまい覇気がなくなったムドは後ずさりしている。

だが、逃がさない。

俺は奴が体につけていた鎧の留め金を器用に熔かし、鎧を剥ぎ取る。剥ぎ取られたところは、ムドの肉体がさらけ出されている。

「ま、待ってくれ・・・」

「いや、待たない。こいつで終わりだ！」

相手の懐に入り込み、身をかがめて力をため、

「裂衝脚!!」
たじろしちしち
やせししちちへ

格好よく技名なんて言いながら、おもいつき蹴りを放った。

ドズーン!

俺の渾身の一撃がムドの体に当たる。
鎧を着ていたところで、それを粉碎してしまうほどの威力があった。
その一撃が生身の肉体に当たったのだから、肋骨の粉碎骨折は間違
れないだろう。

ムドはそのまま地面に叩きつけられ、その場に倒れたまま動かなくな
った。

まさか殺してないよな・・・

不安になり、静かに近づき脈と呼吸を確かめる。

どうやらまだ生きているみたいだ。

ひとまず安心する。

「さて残るは・・・」

俺はもう一人の相手に目を向ける。

そこでは、ロイとフグが戦っている。遠目で見ても分かるくらいに
ロイはかなり体力を消耗してしまっているが、一方のフグはと言っ
と全く疲れの色を見せていない。

どう見てもロイのほうが押されている。

「まずいな、」

俺は急いでロイのもとに駆け寄って行った。

これからこの模擬戦の第二幕が始まるのだ。

果たして俺たちは無事に勝つことが出来るのだろうか？

第07話 激闘！？救世主VS武学の主席 前編（後書き）

大変読みにくくなっていたと思います。

もっと読みやすくなるように努力します。

第08話 激闘！？救世主VS武学の主席 後編（前書き）

某オンラインゲームにハマリ更新が半年遅れました。

長い間お待たせして申し訳ないです><。（待ってた人いるのかな

あ
…

第08話 激闘！？救世主VS武学の主席 後編

「オラア！」

ロイは相手に近づき剣を振るう。

しかし、その攻撃を完全に見切っていたフグは、サラリと身軽に避けるとその手に持っている漆黒の剣でロイに切りかかった。

「くっ、そ……」

ガシャン！

その攻撃をロイは自らの鎧で防ぐ。

敵の攻撃のあたったところはへこんでしまった。

他のところもよく見てみると、ロイの体のところどころには剣で切られた無数の傷があった。

俺が来るまで持つのが精一杯だった感じだ。

こんなところで観戦してる場合じゃないな。

俺は急いでロイのところに向かって、全速力で走った。

「大丈夫か、ロイ！」

すぐさまロイの隣につきナイフを構えながらフグに向き合う。

「センヤ？……お前無事だったのか？」

「ああ、なんとかな。」

どうやら俺がムドに勝ったことになり驚いているようだった。アレだけ強い相手だったので負けるとおもっているのが当然だろう。俺の場合、体質が勝負の決めてがったからな、普通の人にはきついに決まっている。

いや、むしろ勝つことはできないだろう。

俺って最強？

なんて自惚れてみたりして。

「そうですか、あのムドを倒しましたか。見た目とは裏腹になかなかやりますね。」

フグはそういって少し考えた後に、

「分かりました。それでは私もこれから本気で戦わせてもらいましょうか。」

と続けた。

つまり、今まで手を抜いて戦っていたと言っただからたちが悪い。ロイの顔を見ると、もう疲れきっていて今にも倒れそうな感じだ。

「だとさ。ロイ、お前は少し休んでろ。ここからは俺が」

「うをおおおおー！」

キーン！

とか言っているうちに、ロイはもう切り込んでいた。

この場でも人の話は聞かないんだな。いや、この場だからか？

「相変わらずの猪突猛進ですね。相方が困っていますよ?」

「うるせえ!手抜いて遊びやがって、俺はオモチャじゃねー!」

とにかく剣を振りながら相手に突進する。

だが、ただ単に振り回しているわけではなさそうだ。

一応あいての急所は狙っているみたいだが、フグの回避能力にはその攻撃は無駄だった。

かろうじて、全て避けられるものではなく何度か盾か剣で受け流さなければいけないような攻撃をロイが放つ。

そんな事が出来るだけでもすごいことなのだろう。

フグが剣で攻撃を受け流すたびに歓声上がるのだからな。

「流石ですね、アンドロイ。攻撃の時はいい動きをしていますね。」

避けながら余裕の笑いを浮かべながら喋る。

「しかし、防御あつての攻撃です。アンドロイ、君はスキだらけだ・
・・・」

ロイは剣を振りかぶるとフグの頭上めがけて振りかぶった。だが、その攻撃を待っていたと言わんばかりにロイの左側に避けてから、その漆黒の剣を下段に構えながら身を屈め、

「攻撃が単調すぎですよ。」

「くっ!」

ロイの胴体めがけて、思いっきりの一撃を見舞う。

キーン!

「つゝ！効くねえこりゃ。」

「なっ!?!」

「ほほう、やりますね。」

間一髪、ロイに剣が当たる寸前に俺が割り込み、手に持っていたナイフで奴の攻撃を受け止めた。

ナイフはリーチが短い為衝撃が直に伝わるので、落したり手の皮が剥がれないようにグローブをはめている。

それでも、腕への衝撃は決して弱いものではなかった。

ロイはすかさず振り下ろした剣を、下からすくうような感じにフグめがけて斬りつけた。

この状況下でも攻撃をする事が出来るのだから、奴の言う通りに攻撃面に関しては強いのだろう。

その攻撃を軽く身をひねってかわすと、フグは俺達から離れて5メートルくらいの間合いを開けた。

流石にゼロ距離での2対1は不利だと思ったのだろう。

「わりい、助かった。」

「気をつけるよ、ロイ。今のは上手く行ったけど、次は分からないからな。」

「ああ、分かってる。」

本当かよ。まあ、それなら良いんだけどさ。

完全には安心しきれないが、ここはロイを信じるとしよう。

「2対1ですか。少々キツいかもかもしれませんが、これも調子にのっ

ていたムドのつけがまわってきたと思うべきですかね。」

フグは肩に巻いていた鎖をほどき、先端を回し始めた。

それと同時に奴の持っていた漆黒の剣が青みがかつた色に光始めた。

なんだ？あの装備は。

すると隣に立っていたロイが、心なしか後退しつつある様に見える。顔は今までになく真剣で、そして悔しそうな表情だ。

「どうした？ロイ。」

「センヤ：気をつける。あの武器は」

ジャラジャラジャラジャラ

耳障りな金属音を鳴らしながら、フグの鎖がロイめがけて飛んできた。

「っ！」

何を考えているのか、ただの鎖でしかない物なのだから剣で弾けばいいのに、わざわざ転んでまで避けたのだ。

「ロイ、お前なにやってん」

ドスッ！

地面に倒れているロイにフグが目にも留まらぬ速さで切りかかった。

ロイはその攻撃を地面をコロコロ転がりながら避けている。

いずれも、ロイなら剣で弾ける程度のものだった。

だが、ロイは防いだり弾いたりせずただ避けるだけだ。

なんで反撃しないんだよ！

痺れを切らした俺はフグに襲いかかった。

「はああ！」

ヒュッ！

俺の放った一斬は見事に宙を斬った。

「ちっ！外したか。」

また相手との距離が5メートルほど開いた。

そして足元に倒れているロイの手を取り立たせてやる。

体中が土で汚れてしまっているが、大した怪我はしていないようだ。
ジャラジャラジャラジャラ

再び鎖が飛んでくる。さっきと違うところは、狙いがロイでなく俺だと言っことだ。

「こんな攻撃！」

俺はナイフを前に出し、その鎖をはじき返そうと構える。
が

「センヤ、あぶねえ！！！」

「お、オイ！」

何を血迷ったのかロイは俺に横から体当たりして、地面に倒した。
そして、飛んできた鎖がロイの剣に絡んだ。

その瞬間

「うぐあああああああ！」

ロイがいきなり叫び始めた。

「どうした！ロイ、大丈夫か？」

俺の呼びかけに首を縦に振り、手に持っていた剣を投げ捨てた。

「は、はあ。助かったぜ。」

「何が起きたんだよ？アレは一体……」

ジャラジャラジャラジャラ

休む間もない。

再びその謎の鎖が飛んできた。

さっきの出来事でナイフは地面に落ちている。

ロイのように避けたとしても、フグの追撃を食らうだけだ。

こうなったら！

俺は目の前に迫ってきている鎖を避けられないと悟ると、それを手でつかみ取るうとする。

ロイの反応から見るに、明らかにこの鎖には仕掛けがしてある。それは何か知らないが、体に直接当てて被害を受けるよりは手だけですました方がいいと考えたからだ。

「センヤ、正気なのか!？」

「ふふつ、自ら死に行くとは、なんて愚かな。」

周りの連中が何かを言っているがもう遅い。
俺はその鎖を左手だけで受け止めた。

さあ！なんだか知らないが来るなら来い！

.....

.....

.....

...

あ、あれ？

今日で2度目の沈黙が闘技場に訪れた。

観客席の連中は目を大きく見開いているやつや、目を擦ったりしている。

ロイは俺の近くで石化してしまったように動かない。

フグは一言

「ばつ、馬鹿な.....」

と呟いた後にロイ同様、動きが止まってしまった。

また俺なんかしちやっただのか？

流星に何回も沈黙が訪れると、ヤっちまったと言う罪悪感が生まれる。

その罪意識から今が絶好の攻撃チャンスにもかかわらず動けなかった。
でいた。

「クっ！」

フグは鎖を引き戻した。

「あなたは化け物ですか？この私の“スパークチェーン”が効かないなど、通常の間人ではありえません。」

「え？スパークチェーンだつて？」

スパークチェーン、スパークと言うのだから電気が関係しているの
だろう。

「スパークチェーンって何だよ？」

「いいでしょう、教えてあげます。スパークチェーンとは魔宝石を
加工したものを幾つも繋げた、言わば鎖です。」

魔宝石……、確かムドの武器もそれと同じ素材で造られたつて言っ
てたな。

「そして、この魔宝石には電気属性がついていて普通の人間なら感
電するのです。無論剣や盾、鎧は鉄できているのでそれらは防具と
しての役目を果たさない。」

だからロイは奴の攻撃を弾かずにただ逃げ回っていたのか。

「それなのに貴方は！」

ジャラジャラジャラジャラ

いきなりそのスパークチェーンとやらを投げってくる。

俺はさっきと同じように左手で平然と掴んだ。

「何故そのように平然と立っていられるのですか!」

「何故って言われてもな……」

俺には心当たりがない……ん？電気？もしかしたらコレのせいか？

手にはめているグローブを見る。

やはりそうか。

このグローブは特殊繊維で作られているので、衝撃に強く耐熱性に優れていて電気を通さない。

どうりで奴の攻撃が効かないはずだ。

「あっはははは!」

種が分かればどうって事はない。

要はあの鎖を手で防げばいいだけだ。フグを倒してしまう事は容易では無さそうだが、俺になら出来る。

しかし、俺が倒してしまっただろうか？

ふとそんな疑問が頭に浮かんだ。

ふと隣に立っているロイを見ると、かなり悔しそうな表情でフグも睨んでいた。

今まで何度も負けていたに違いない。

そこを俺が始めての手合わせで倒してしまってもいいのだろうか？いや、よくないだろう。

「・・・」

俺は手にはめていたグローブを取り外すと、それをロイに渡した。

「ロイ、これを手につけてフグの野郎と思いつきり戦って来い。」

「センヤ、これはなんだ？」

「俺がやつた武器を食らわなかったものだ。それをつければお前も同じようになれる。ただし、手だけだけだな。」

「センヤ・・・」

「まあ、俺も援護くらいはするけど、お前の手でこの戦いを終わらせて来い。」

ロイは少しの間頭を下に下げてナニカぶつぶつと呟いた後に、俺のグローブを手にはめた。

そして勢い良く顔を上げて真っ直ぐにフグを見据えると、

「センヤ、この借りはいつか必ず返すからな。」

「期待して待ってるよ。」

今までの疲れなどつそのように、晴れ晴れとした元気な声でそう言った後に

「いくぞおおおおお！！」

「おう！」

いつものような騒がしさでフグに斬りこんで行った。

「アンドロイ、あなたはまだ私と戦うつもりですか？勝敗は目に見えてますよ。」

「うるせ！今までの俺とは違うんだよ！」

キーン！カアーン！シャキーン！

ロイの激しい攻撃にさすがのフグも苦戦しているようだ。

今までは、その装備特有の“感電”のせいで逃げ腰だったロイだが、その脅威がなくなったことにより今まで以上の攻めができるようになっていた。

おそらくこれが本来のロイの戦闘スタイルなのだろう。

しかし、攻撃はかなり強くなっていたがその反面、防御に関しては今までよりも若干下がっているようだ。

「ま、そこをフォローするのが俺なんだよな。」

.....

.....

...

それから一体どれくらいたったのだろうか？2対1と言う有利な条件下でありながら、フグは俺たちと互角以上の戦いをしていた。けれど、それ以上に驚かされるのはフグとロイの体力だ。

「はあ...はあ...はあ...、何なんだよこいつら。体力ありすぎだろ。」

かれこれ休み無しに2時間以上は打ち合っているのに、息を切らせているのは俺だけだ。いくらフグの武器の性質のせいで行動が制限されていて余計な体力を使うからと言っても、俺とは比べ物にならないほどに体力の差がありそうだ。

流石、戦闘専門の訓練所だ。俺も体力作りしなおすかな？

「アンドロイ、そろそろこの茶番を終わらせましょうか。」

今までロイと切り合っていたフグだが、一気に後ろに跳び下がり、結構な間合いを開けてロイと対峙する。そして闘技場を見回しながら剣を構える。

「ギャラリーの方々も終結を待ちわびてるでしょう。」

膝を曲げ、腰を落とし、剣を右手で持ち頭上で構え、左手を刃先に添えて、鋭い目付きでロイを見据える。

「この一撃で勝負をつけましょうか。」

「……………」

「さあ、どうしました？アンドロイ、貴方も構えないと死にますよ。」

「ああ、分った。俺もそろそろ終わらせようと思ったところだったからな。」

その大剣を軽々と上下左右に2・3度回し、両手で掴みながら剣を

下段で構える。

二人とも凄いオーラを発している。

ん、もしかして俺浮いてる？

「ヒバリ…と、言いましたでしょうか？」

「あ、ああ。そうだけど？」

いきなり振られて焦る俺。何てダサいのだろうか。

「この一撃だけは私とアンドロイドだけの一騎打ちにさせていただきますからね。貴方が余計な手出しをして死人が出ては困りますからね。」

「センヤ、俺からも頼む。この一撃だけは手出ししないでほしい。こいつとは、決着をつけないといけないからな。」

どうやら俺の知らない事情がありそうだな、この二人には。

「分った、俺は何もしない。けどな、ロイがやられた時には俺が奴を倒すからな。」

「おう、よろしくな。」

一瞬だけ俺の方に笑いかけたかと思うと、その鋭い眼光をフグに向ける。

「それでは、行きますよ……」

「こっちも行くぜ！」

フグその場で更に腰を落とし、ロイはフグ目掛けて全力で走り始めた。

「私は！」

「俺は！」

『“この一撃に全てを賭ける！！”』

「受けてみよ、奥義飛蓮電雷剣！！」

「食らえ、秘技光刃月華斬！！」

白い光が一直線に凄いスピードで走って行き、蒼い光がそれを待受ける。

それは一瞬の出来事だった。

白い光と蒼い光がぶつかった瞬間に闘技場全体が揺れるほどの大きな衝撃が走った。

二人の接触場所は砂埃が舞っていて、どっちが勝ったのか、もしかしたら相打ちなのかも分らない状況だ。

とりあえず、近くに行くか。

「ロイ！大丈夫か！？生きてたら返事しろよ！」

よびかけて見るが応答はない。まさかやられてしまったのかという不安が頭を過ぎる。

と、その時に大きな風が闘技場に吹き込んだ。そのおかげで闘技場がないにたまっていた砂埃が一気に吹き飛ばされてようやく視界が回

復した。

「あっ……！」

その光景は凄いものだった。

立っている人影は二つ。一人は右手に剣を持ち体全体で前に剣を突き刺す様に、もう一人は剣を両手に持ち右上に掲げている様な感じだ。

前者がフグ、後者がロイであることは一目瞭然だった。

二人とも7・8メートルくらいの間を開けて背中合わせに立っている。

フグの目の前には何かでえぐられたかのような大きなクレーターが出来ていて、二人の衝撃が凄まじいものが分る。

こいつら人間じゃねーよ、もう。

いつか他人いわれた台詞が頭に蘇る。

と、その時に今まで動かなかった光景に変化が生じた。

ロイが掲げていた剣を降ろして、また数回回転させたのちに背中に戻った。

フグはその場に跪き、剣支えにしなからこちらに顔を向け、

「私達の負けです。アンドロイ、ヒバリ…あなた方の勝利です。」

そう言うのと力尽きたのか、その場に倒れた。

《試合終了！！勝者、アンドロイ・クロウ！ヒバリ・センヤ！》

ワアア~~~~！！！！

観客席からはどんな気持ちでいるか分からない叫びで耳が痛い。

「おい、センヤ。」

いつの間にか来たのか、ロイが俺の真隣りに立っていた。てつきり喜びで叫びのかと思ったが、何故か真面目な表情をしている。

「後で話がある。今晚お前の家に行くからな。」

「え……………?」

一体どうしたのだろうか?これは理由を聞くべきなのだろうけど・

「んじゃ、それまで勝利の祝杯でもするかあ!!!」

「あ、ああ。そうだな。」

すっかり本調子に戻ってしまっているので、今夜聞けばいいか。

一体何の話だろうか?

…って、アイツ俺が住んでる家、もといエレンの家知ってるのかよ!?

第08話 激闘！？救世主VS武学の主席 後編（後書き）

感想や批判、修正点などがありましたら何でも下さい。

第09話 救世主の夜（前書き）

また更新が遅れてしまい申し訳ないです；

第09話 救世主の夜

「はあ、今日はとてつもなく疲れたなあ…」

その夜、俺は自室のベットに腰掛けてナイフと、今日は使わなかった銃のメンテナンスをしていた。

ナイフは今日の激戦のせいで多少は傷ついているものの、刃こぼれはしていない。これなら刃を研がなくても良さそうだ。

銃の方は全く使っていないにもかかわらず、ただ所持してただけなのに砂埃などが中に入り込んだり、砂利などで傷ついている。

「やっぱり本当の戦闘でオモチャは使えないか…」

威力こそはそこそこあるものの今日の戦闘を思い出すに、全身鎧を来ていたムドには使えないし、驚異的な回避力を誇るフグには本物ですら当たるか分らないのにオモチャの改造とはいえその弾速ではまず当たらないだろう。

「やっぱり俺には接近戦が向いてるのかね？」

ハンドガンの整備をしながら自分は狙撃手には向いていない事を実感する。

「あちゃ、これはもう使えないかな…？」

ハンドガン用のマガジンをばらす。そこにはかなりの量の砂が入っていて、中に入っている細長いスプリングがボロボロになっていてかなり酷い状態だった。

「どうせ使いそうにないし、予備のマガジンでいいか。」

いつもならこれくらいの損傷はパーツの入れ替えで済ませるが、今はその替えるパーツが無いので壊れたら諦めるしか無い。とりあえず、予備のマガジンをリユックから取り出し鉛玉を装填する。

ガシャ！

昨日の持って来た薪を部屋の端に立たせて、その対角線上の端からそれを狙う。

「・・・」

タンツ！

鉛玉は見事に的である薪に当たる。そんなに脆い薪では無かったけど、鉛玉は貫通一步手前のところまでめぐりこんでいた。生身の人間に撃つたら確実に命を奪えるだろう。

「今よく考えると、いつものサバゲーって命懸けだったんだな。」

しかもこれって十分犯罪だよな…。

ふと携帯のディスプレイを見る。アンテナは勿論圏外を表示している。なので、バッテリー節約のために電波OFFモードにしてある。時計は手動設定でこの世界の時間にあわせてある。どうやら時間の進み方や日付などは全次元で統一されてるらしく、俺の手持ちの電子機器も全く使えない訳では無さそうだ。

「これは日本時間のままでいいよな…。」

それは俺の誕生日にマサから貰った腕時計だ。

俺らのような歳のやつらはデジタル時計を買うのが普通だが、マサはアナログ式の物を買っていた。理由を聞いたら『デジタルより狂わないし、見た目がいいだろ?』とか笑いながら言いやがった。

まあ、俺としてもアナログのが好きなんだけどさ。

その時計を机の引き出しにしまう。

今の時刻は午後8時48分だ。

試合後にロイが、俺の家に今夜来ると言っていたが当然場所を知るはずもなく、教会前の噴水がある広場に集合と言うことになった。エレンの話によれば、ここからなら徒歩で5分もかからないらしいが、道に迷う可能性がある俺は早めに出る事にした。

部屋を出て玄関に行く。エレンにはもう話はしてあるのでこのままでもいいだろう。

それにしても、今日の模擬戦での勝敗を当てる賭けに勝ったのがエレンだとは思わなかった。

「正直驚いたよな・・・」

いやさ、俺に賭けていたのは、自分が召喚した奴だからってのは分かっている。そうでは無ければあいつのプライドが許さないだろう。俺はむしろ、あんの裏の賭け事にかなりの優等生エレンが参加するとは思っていた。

「まあ、そんなことは人それぞれだよな。」

俺だって元の世界じゃ一般的に言われる不良つてのに近いかもしれないが、決して人に迷惑をかけたや殴ったりはしていない。

・・・と、思う。

だから、優等生でも賭け事をするのも同じようなものだろう。

「っと、じゃちょっと行って来る。」

玄関であるう場所から、部屋の中に向って叫ぶ。俺はエレンが何処にいるのか知らないからそうするしかない。

ガチャ

「ちょっと待ちなさい。」

扉が開くと同時にひょっこりと部屋から顔を出すエレンがそこにいた。

「ん？何だ？」

「あなたは私と私のお母様、そしてロシエル以外には自分が私の救世主と言う事を教えては駄目よ。」

「別にいいけど、どうしてだよ？」

今までは自分が召喚した救世主だって自慢げに語っていたエレンが、言うてはいけないと言うのが少し気になった。

「それは奇襲を防ぐためよ。」

「？？どう言う意味だ？」

訳も分からず聞き返す。

「あなたは来たばかりだから知らないかもしれないけど、普通は救世様を召喚させるのは大会が始まったその日なのよ。」

「何でそんなにギリギリなんだよ？」

それではお互いに信用し合う時間が無くて、思うように戦えないと思う。

「それはね、大会前に救世様を殺されなためよ。」

「え？大会前に殺されても、また救世主を召喚すればいいじゃん。」

「はあ、全く。」

やれやれと言う感じに首を振る。

「召喚魔法って言うのはそんな簡単じゃないのよ。一度に消費する魔力は半端じゃないわ。私だってあなたを召喚するのに5年間魔力をためていたのよ。どんなに偉大な魔術師だって1年分の魔力が必要なの。だから大会前に召喚して、もし殺されてしまったらもうその大会には出れないのよ。」

「なるほど。俺が救世主だって知れたら、周辺の連中に殺られるかもしれないってことか。」

「ええ、そうよ。だから絶対に他人には言わない方がいいわ。」

「分った、肝に銘じておくよ。でもさ……」

ここで一つの疑問が浮かぶ。

「そんなリスクをおかしてまで、どうしてこんなに早く召喚なんてしたんだ？」

「そ、それは……」

お？何だ？急にエレンが顔を伏せたぞ。しかも珍しくどもってるし。

「それは……、何だよ？」

「……」

「お〜い？」

「べ、別に何だって良いじゃない！作戦よ作戦！それよりも、あなたは誰かと待ち合わせしてるんじゃないの？早く行かないと遅刻するわよ。」

「あ、イツケネ忘れてた！じゃあ俺行つて来るわ。」

俺の命に関わる事だったので聞きたかったが、今は約束の時間が迫って来ているので後で聞き出すことにしよう。

でも、なんでエレンはその理由を俺に隠すのだろうか？

「まあ、そんな事は後でいいか。」

「何か言つたかしら？」

「いや、何も。」

改めて携帯の時計を見る。液晶画面のデジタル時計は8：54を表示している。

こりゃ、走らないと間に合わないな。

ガチャ！

玄関の扉を開けると、俺は待ち合わせ場所に向って全速力で走り始めた。

ロイの事だから遅刻しているかもすれないが、あの雰囲気からすればそれは無いだろう。

ただでさえ知らない場所なのに時間も無い。間に合うのか？

道は覚えてきたとはいえ、周りに街灯などは無く、所々家から漏れて来る明かりだけが頼りだ。

「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・」

体力には自信がある俺だが、こんなに1日中動き回れば流石にもたない。

「ハアツ・・・ここ・ハアツ・・・右だっ・ハアツ・・・たな・・・」

一際大きな通りを右に曲がる。

っ、着いた！

ようやく目的地である、教会前の噴水広場にたどり着いた。時間はまだ8：59で、ギリギリ遅刻はまのがれた。

「ハアツ・ロイは…まだ来ていないのか？」

息を整えながら辺りを見回す。が、そこにはロイどころか人影ひとつすら無い。

「あいつ、やっぱり遅刻かぁ・・・？」

再び時間を確認すると、時刻は9時になっていた。

「それにしても、静かだな。」

まだ夜の9時だと言うのに、街は静寂に包まれていた。

街に灯がないのでその分、夜空に星が綺麗に瞬いている。天体もどの次元も同じなのか、月が今まで見た事無いくらいに輝いて見える。すげえ星空だな。

都会育ちの俺は今まで見たことの無い光景に、ただ感動していた。

『今宵の月は良い輝きだろう、センヤ。』

「え…？」

不意に何処からか声を掛けられる。

俺としたことが、星空に見入っていて人の気配に気付かないなんて。

『月の輝きは、その元である太陽をも上回るほどに美しい。』

静寂の広場に響き渡る声は、耳で聞くのでは無く身体全体で感じ取っている錯覚だ。

とても穏やかで静か、それなのに力強く心に響く。

「・・・」

身体の全神経を集中させて、その声の音源を探す。

『その美しき輝きも、すぐに、朝、がきて消えてしまう。』

右か…左か…

『その美しくも儂い輝きは我を魅了させ、力を分け与える。』

前か…後か…

『ゆえに我は月夜にしか存在しえない。』

違う…、上だ！

音源をみつけだし、顔を上げる。

教会の門の上についている十字架に、そいつの姿があった。

俺の位置からだちょうど月をバッグにしているように立っている。

『我が名は、月下の騎士…アンドロイ・クロウ！』

間違ない。性格や口調が全く違うが奴はロイだ。

スタァン！

教会の十字架から軽く飛び降りて、噴水を挟んで俺の向かい側に着地する。

「ロイ……なのか？」

『ああ、そうだ。』

「どうなってるんだよ……」

何が何だか分らない。

いつその事別人だったらいいのに、そいつは自らアンドロイドと名乗っている。

だが、俺の知ってるロイとは似ても似つかない性格だ。

『センヤ、お前に決闘を申し込む。』

「…は？」

『では……行くぞ!!』

「おい、ちよ……!!」

性格が違うのに、人の話を聞かないところは同じだ。

言うよりするが早く、ロイは3mはある噴水を軽々と飛び越えると、俺目掛けて突進してきた。

“どうする!!どうすんのよ、俺!”

たたかう

とくぎ

ほっぺ

よける
にげる

ロイが突進してくる。

この間合いでは回避することはそう難しい事ではない。

俺はロイの攻撃を見切ると、剣を振り下ろす瞬間に後ろへとワンス
テップ踏む。

ヒュン！

ロイの剣先が俺の顔面スレスレで空振る。

ほんの少しでもタイミングが違えば頭から真つ二つだっただろう。

『ふっ、流石だな。やはりこの程度の攻撃では掠りもしないか。』

「まあ、な・・・」

今の攻撃は遊びや冗談では無く、本気で俺を殺そうとしていた。

『これは、久し振りに少しは楽しめそうだ。』

「ったく、本気で殺し合いだよ。」

『ああ、我はそのためだけにここにいる。』

ロイは剣を持ち上げ俺の顔に向ける。

『剣を抜け、センヤ。さもなくば死ぬぞ！』

「剣なんか持って来てねーよ。」

俺の何処をどう見れば剣を持っているように見えるのだろう。

『心配するな。センヤ、お前の剣はその‘拳’であるっ。』

「要は丸腰で闘えってワケか。」

俺はため息をつきながら奴の目をみる。

その瞳は憎むでもなく怒るでもない。ただ己の責務を果たそうとしている感じだ。

交渉は出来なさそうだな。

俺は心の中で覚悟をキメる。

「…わかった。そこまで言うなら、やってやるよ。」

『いい覚悟だ。我の相方にふさわしい。』

「あん？」

相方って何のことだ？

『っ！』

ロイは剣を引き、後ろに大きく跳び下がる。

『さあ、始めるか！』

「けっ！やってやんよ！！」

俺たちはお互いに一呼吸おいてから、相手に向かって走り始めた。

『はああああああああ！！！！！』

「うおおおおおおおお！！！！」

こうして本日二回目の正真正銘の“殺し合い”が始まった。

果たして先夜はアンドロイを殺してまで勝ってしまうのか。それとも自分が殺されて負けてしまうのか……

はんっ！どんな結果になるかなんてのはなあ、運命とやらに任せとけばいいんだよ！！！！！！

第10話 救世主と月下の騎士

なんと言っか、なってしまったのは仕方ない精神で滅多な事では後悔しない俺だが、今は自分の選択に後悔せざるをえない。

まずどんなに体術に自信があるうが丸腰で武装した相手に向かうのは自殺行為だ。

更に、ロイの戦闘スタイルは攻め重視の攻撃型というのだから質が悪い。いくら攻撃を避けたり弾いたりしたところで、ロイを後退させることは出来ない。

その反面、俺はギリギリのところまで攻撃を躲すのが精一杯で、とても反撃できる状況では無かった。

『はああっ！！』

「くっ！！」

胴を断ち切らんとばかりに放たれる剣を身体を捻らせ紙一重で躲す。攻撃をする度にロイは速く鋭くそして確実に俺の命を奪いに来る。

丸腰は無理と判断してからは辺りに武器になりそうな物が無いか探す。夜の広場には噴水しか無い。

ナイフと銃は家に置いてきたし、この状況を打開する策は一向に見つからない。

『どうした、センヤ！逃げるだけが精一杯か？』

「ちいっ！！」

ロイは大振りに剣を俺の頭目掛けて振り落とす。

それを左にステップを踏み軽く避け、奴の顔面を狙って渾身の右ス

トレートを打つ。

『ふんっ！』

振り下ろした剣を構える事もなく、月下の騎士は後ろに跳躍し、戦闘が始まってから始めて間合いを離れた。

昼間のロイなら今の攻撃は躲す事は出来ない筈だが、今日の前に居る騎士はロイよりも遙かに強い。

「いや、そうじゃないか、」

そう、只単に昼間は何らかの規制がかかっていて本来の力が出せないのだ。

「要は、俺は絶体絶命ってコト、ね。」

誰にいうでもなく呟き、奴との間合いを離しながらこの状況を打破する策を考える。

まず、相手の装備は刃渡り1mくらいはある大剣だ。この打ち合いで何度か間近で見えていたが、その剣の刃はとても鋭いものではなく、少し触れたくらいでは物は切れないだろう。

現に俺の服に何度か刃が掠っているが擦れた跡がついたくらいで服は切れ目の1つも入っていない。物を断ち切る日本刀のようなものではなくもの叩き斬るという概念のもとで造られたものなのかもしれない。

俺が今まで逃げ切っていたのはきつと相手の剣の切れ味の悪さのおかげだろう。

そして、昼間は鎧らしきものを着ていたのだが、今は身を守るものは一切つけておらず街の人たちが着ているような軽装だ。

俺の打撃攻撃は当たらなければいいという考えなのだろう。

わざわざ重い装備をして攻撃が当たるリスクを背負うよりも、全ての防御をはずして回避に専念した方が一番安全だからな。

もつとも、あいつが避けることなんてめつたに無いけど・・・

他には特に何も持っていない。普通の戦闘ならここまで一方的に押されることは無いだろう。

だが今の俺はというと、相手が剣を持っているのに対して何も持っていない。服もとても動き易いとは言いがたいWZ指定の制服。

普通の私服よりは強くつくられてはいるが、とても剣を防ぐことはできない。

『打ち合い始めて、おおよそ1時間弱 といったところか。』

「・・・」

無言でロイとの間合いを保つ。

『よもや、これほどの時を使うとはな。』

ロイは少しだけ口を歪ませていた。

何が面白いかなど俺にはわからないし考える余裕も無い。

『よく素手で我と対等に渡り合えたな、センヤ お前は想像以上だった・・・だが、』

やつの口調が急変した。

今までの穏やかで心に響く声が、まるで地獄の底から叫ぶような怒りや憎しみが籠った声になった。

俺は背筋が凍りつくような悪寒が走り、体中を張り詰めていた空気

が冷えた気がした。

『これ以上の打ち合いは無為に等しい!!』

「っ!!!!」

目の錯覚なのだろうか。奴を中心に光の波紋が広がったように見えた。

そして次の瞬間

『我が力を封印されし剣よ、今こそ真の力を解き放て』

ロイの手元にある剣が輝き始めた。そう、それは昼間見た時の様に眩しく直視できないくらいに。

やばい!!

俺の頭はの中で警報が鳴る。

『我が名はアンドロイ・クロウ。汝と契約を交わし者』

ロイが言葉を発するたびに剣の輝きは強くなっていき、その剣を中に風が取り巻いているようだ。

昼間見たのとは比べ物にならない!

「あ・・・」

いまさらながら気がついたことがある。

あの剣は昼間ロイが持っていたものとは違うということだ。形や大

きさなどは似ているものの、微妙に剣の柄の部分の装飾が異なっている。

確か昼間の物は素朴な感じで本当に戦う剣という雰囲気だったが、今ロイが持っているものは、柄の下に水晶玉のような物がついていて、柄自体も派手な金色をしていた。

何で今まで気がつかなかったのだろうか？

「ちいっ！」

これ見よがしに舌打ちする。

もう俺には戦うことはおろか、抵抗することも逃げることもできない。

まさに料理されるのをただ待っているだけの“まな板の上の鯉”だった。

『剣よ、我が呼びかけに応えよ』

一瞬の静寂が訪れた。本当に一瞬だけのはずなのに永遠に続くかのように思えるほどで、全ての時間が止まってしまったかのような錯覚だ。

そして、その静寂を破って先に行動したのは俺だった。

「はあああああああああ！！！！」

雄叫びをあげながら相手に向かって一直線に駆け出した。

『フン、気でも違ったか？自ら死にくるとはな。』

ロイは鼻で笑うとニタリと薄気味悪い、そして己勝ちを確信したように口を歪めた。

『これで最後だ！食らえ、秘技…』

昏間に見たものと同じ構えを見て確信した。どうやらフグと決着をつけた時と同じ技を使うつもりでいるようだ。

読み通りだが…いけるかっ!？

俺は負けず嫌いで諦めが悪い。どんな絶望的な状況に置いても終わりが来るまで足掻き続ける人間だ。例え可能性がゼロに等しくても、ゼロではない限り諦めない。今までだってそれでなんども乗り越えて

来たこと無いなあ・・・

だからといってここで諦める訳にはいかない。勝算はないに等しいけど、ほかに方法は思いつかない。

ポケットの中に手をいれさつきから違和感を感じていたソレを握る。

『光刃月華斬!!』

「そこだああああ!」

相手の剣が振る下ろされる刹那、ポケットの中にあつたものを投げつけた。ソレは光を放ちながらロイの方へと向かってゆく。

『悪足掻きか!』

勢いよく向かってくる物体をロイが剣で弾いたその瞬間、剣によって碎かれたソレは一瞬にして粉となり辺り一帯に拡散した。

そう、ソレは昨日俺が炎の属性のついた魔鉱石を飲まされた時にっいでにもらった光の属性がついた魔鉱石だ。もともと小さな塊ひとつでさえ裸眼で直視できないほどの光を放っていたのだが、粉々にされたことにより一個のときより光を発している表面積が一気に増えて、その粉が漂っている周辺は何も見ることができないくらい強烈な光に囲まれた真っ白な世界に変わってしまった。

『な、何だこれは?!こんな手を残していたというのか!』

俺はそのままロイの隣を走り抜けた。魔鉱石を砕いてしまった中心にいたロイには一体何が起こったかもわからないだろう。

俺自身成功するかわからなかったしな・・・

サングラスは部屋に置いてきてしまっていたため俺も視界を奪われたことには変わりはない。が、俺にとっては視覚などはそんなに必要は無いのだ。戦闘時に相手が自分から見えるところにいることなどまず無い、そこで俺が鍛えたのは聴覚と身体全体の感覚だ。音を耳で聞き空気の動きを身体で感じ取る、これが俺の索敵方法だ。

ここで決めなければ後が無い・・・!

光が徐々に薄くなってきた。宙に舞っていた粉がだんだんと地面に落ちていくからだろう、あまり時間がないことにいささか焦りながらロイの動きを探る。

どうやら奴は下手に身動きをせずに俺の出かたを伺っているらしい。

それなら好都合だ!

「そこだあああああああああ!」

俺は走っている勢いをそのまま乗せてロイめがけて渾身の蹴りを放った。

第10話 救世主と月下の騎士（後書き）

いろいろあつて更新できませんでした・・・
それにしても、一年以上放置してていまさらしても意味ないかな；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2196b/>

救世主 = . . . オレ!?

2010年10月21日02時50分発行